

第6章

事業に対する評価・提言等



国立公文書館アドバイザー
元ボスニア・ヘルツェゴビナ特命全権大使
山崎日出男

はじめに

私は、今回、団長として次世代グローバルリーダー事業・世界青年の船に乗船しました。「世界青年の船」事業は、1988年に開始されましたが、私は当時の総務庁青少年対策本部で、この事業の立ち上げに深く関与しました。しかし、その後ワシントンの在米日本国大使館への異動などもあり、事業に参加する機会がありませんでしたので、今回、団長として参加することになり、関係する皆様に深く感謝いたします。

危機管理

今回の事業は、改めて洋上での危機管理が問われるものとなりました。出航早々、爆弾低気圧の影響で船が大きく揺れて波乱の船出となり、参加青年の中で船酔いが続出するとともに、インフルエンザが発生しました。管理部では船医と連携して、直ちに患者に適切な医療措置を講じるとともに、プログラムを一部変更するとともに、全参加青年にマスク着用や少人数行動の奨励などの拡大防止対策を数日実施しました。ただし、このような状況の中でもプログラムの遅れを最小限に抑える観点から、団長講話、管理官講話、アドバイザーの講義などのプログラムについては、室内テレビを通して行うこととしました。その結果、プログラムの実施に大きな支障をきたすことなく、インフルエンザを抑え込むことができました。

また、その後も危機管理が問われる事例が複数起きましたが、参加青年の理解と協力を得つつ、管理部が一丸となって迅速に対応したと考えますので、今回の事例は今後にいかせるモデルケースであり、次回以降にしっかりと引き継いでいただきたいと考えます。

船内活動及び寄港地活動

さて、今回、参加青年に突発事態への対応協力を求め

る事例も起きましたが、参加青年の協力を得て、予定されたプログラムをほぼ完全に実施し、船内活動、寄港地活動とも大きな成功を挙げる事ができたと考えます。

船内では、与えられたプログラム以外でも、日本参加青年による自主的活動で各地域の名産品を紹介するイベントを開催しました。現在、世界各地の日本国大使館でも日本食品・製品の紹介・普及に重点的に取り組んでおり、これらの活動は日本外交の一翼を担う活動といえます。

また、外国参加青年は各国の特徴をいかして文化行事を行うなど、この事業ならではの多文化理解を得ることができたと思います。

オークランドでは、ニュージーランド政府青年開発省ニッキー・ケイ青少年大臣を表敬し、ニュージーランドの青少年の現状や施策について理解を深めることができました。現在、ヨーロッパでは各国とも難民問題への対策に苦慮していますが、ここニュージーランドでは多様性を最大限尊重する施策がとられていることに深い感銘を受けました。本事業のニュージーランドから参加青年の多様性にもそれが表れています。

フィジーのスバでは、フィジー政府の全面的なサポートの下で様々なプログラムを実施しました。寄港直後にフィジーのジョサイア・ヴォレンゲ・バイニマラマ首相に船を訪問していただきました。また、同日夜の船内レセプションには、ジョジ・コノウシ・コンロテ大統領とラトゥ・エペリ・ナイラティカウ前大統領に参加していただきました。ジョジ・コノウシ・コンロテ大統領は、挨拶された後、会場を一周して参加青年と懇談され、その気さくな人柄に参加青年一同が感銘を受けました。

その一方で、大統領と首相のお話からは、地球温暖化問題に対するフィジーの苦悩がうかがわれ、今後、次世代リーダーとしてどのような貢献ができるか参加青年一人一人が真剣に考えていく必要があると痛感しました。

管理官評価

内閣府調査官
大熊直人

はじめに

平成28年度次世代グローバルリーダー事業・世界青年の船とは、外国からの参加青年に対する地方プログラム、全ての参加青年を対象とする陸上研修を終えた後、研修の舞台を「にっぽん丸」船上に移し、平成29年1月30日に横浜港を出航、ニュージーランド、フィジー共和国を経て、約18,000キロに及ぶ航海を終え、3月3日に東京・晴海港に帰航、翌4日までの日本参加青年への帰国後研修を修了し、予定していた全てのプログラムを終えることができた。この間、本事業の円滑な実施に協力いただいた全ての関係者の皆様に紙面を借りて感謝申し上げます。

ここでは、管理官の視点から、船上研修を中心に振り返りながら気付いた点などについて記載したい。

船上研修における各種プログラムと参加青年の成長

本事業の目的は、参加青年の異文化対応力やコミュニケーション力を高め、リーダーシップやマネジメント力の向上を図ること、また、国際協調の精神を育てることにより、各分野でリーダーシップを発揮して社会貢献を行うことができる青年を育成することである。この目的に照らし、船上研修では、様々な内容のプログラムが用意されている。具体的には、異文化対応力やコミュニケーション力を高める活動として、異文化理解セミナーや寄港地活動等が、また、リーダーシップやマネジメント力の向上を図る活動として、リーダーシップ・セミナー、プロジェクトマネジメント・セミナー、スキルセミナー、参加青年の企画によるセミナー、委員会活動等が、さらに、相互理解や国際的視野を涵養する活動としてナショナル・プレゼンテーション、コース・ディスカッション等が該当する。

これらプログラムの中には、参加青年による事前準備などの関与度を上げたりする余地があると考えられる

ものもあるが、全体としては、これらのプログラムが意図的に配置され、有機的に連動して効果的に参加青年の成長を促していることが認められた。船の揺れなどにより予定変更をしたプログラムも一部あるが、船上研修として予定された研修内容はおおむね実施することができた。各プログラムの詳細や効果については、ファシリテーターによる報告や参加青年によるアンケートを参照したいが、参加青年全てが、どのプログラムに対しても真剣に取り組んでいること、特に船上研修が進むにつれてより主体的に参加するようになっており、研修を通して参加青年個々が大きく成長できたと考えている。

船上研修の必要性

今回の船上研修34日間のうち、寄港地活動は約7日間であり、物資補給のための寄港を除くと、洋上で過ごす期間は3週間を超える。この間、参加青年は外部からの通信手段から途絶された状態で過ごしながら、人間関係の濃密な生活空間の中で、お互いの関係を構築しつつ、各種プログラムに参加することになる。ある意味において過酷なこの環境を通じ参加青年の間には共感と相互理解が生まれ、強い絆が育まれることは言うまでもない。寄港地ごとにならばにっぽん丸を訪問し、本事業に協力してくれた何年も前にこの事業に参加した既参加青年の熱意と活動がそれを証明している。

言葉や文化の違いを超えた共感と理解に基づく人間関係の構築。本事業の特色である船上研修の効果の一つはまさにここにあり、船上研修を通して生まれたこの関係が彼らの中で今後永く継続することを願うとともに、お互い励まし合い、助け合いながら、社会貢献を目指していく「SWY精神」を引き継ぐ今回の参加青年の中から、世界各地の様々な分野で次世代リーダーが誕生することを確信している。

アドバイザー評価

異文化理解セミナー担当 アドバイザー評価

クレイグ・ベイティ

全5回異文化理解セミナー概要

異文化理解セミナーは総じて好評だった。ただし、一般的にオーストラリア人は非常に早口であり、私は普段の3分の1あるいは4分の1くらいのスピードで話すように心掛けてはいたが、それでも英語を母国語としない参加青年は、特に専門的な内容になったときに、理解が追いつかないと感じたこともあったようだった。一方で、英語を母国語とする参加青年にはスピードが遅すぎて、話を聞きながらも、つい上の空になってしまった場面もあったようだ。しかし、そのような背景を踏まえても、40名以上の参加青年から私が直接聞き取ったフィードバックや、異文化理解セミナー委員会から伝えられた報告(委員会の報告書参照)から、3回の異文化理解セミナーを通し、総じて目標を達成することができ、また、参加青年は私が紹介した手法を実際に活用する場も得られたと考えている。特に、5回のグループ活動が大きく効を奏し、多くの参加青年がセミナーの時間を超えて、異文化理解についてのディスカッションを更に深めることができたと思う。また、各セミナー開催後、参加青年と直接、時には1時間にも及ぶ質疑応答の時間を取れたことも好評だったようである。

アドバンスセミナー

アドバンスセミナーは日本の文化と組織行動論に的を絞り、その分野に興味を持つ外国参加青年と、日本企業の組織行動についてあまり知識のない日本参加青年を対象に開催した。2回のセミナーは選択制だったが、多くの日本人を含む150名以上の参加青年が出席してくれたことは、非常に嬉しかった。一定以上の国内での実務経験がある日本参加青年にとっては、セミナー内容は予想通り非常に基本的で、既知のことばかりだったようである。しかし、外国参加青年や多くの日本参加青年からのフィードバックは概ね好評で、彼らにとって新しい情報を提供することができた。日本で働いてみたいと感じた参加青年もいて、就職やインターンシップの機会を得られないだろうかという相談もあった(前向きに対応するが、実現できるかどうかは定かではない)。

総評

プログラムについて改善点を提案することは本報告書の主旨ではなく、その点については別の時間に行われた振り返りと評価の時間で述べたので、ここでは個人的な見解について挙げさせていただく。

船内活動は、途中ミュンヘンで二日間開催された富士

通グローバル・マーケティング戦略会議に出張した五日間を除き、全ての期間に参加することができた。しかもこの出張はニュージーランドの寄港地活動及びフィジー寄港の準備日程とちょうど重なり、フィジーでの寄港地活動のタイミングでは船に戻ることができたため、私のアドバイザーとしての職務にはほとんど影響することはなかった。また、アドバイザーの仕事のほかにも、セミナー教材を準備する時間の合間を使って、できる限りいろいろな活動に参加するようにしていた。食事の時間にはテーブルを決めて毎回違う参加青年と座り(インフルエンザの隔離期間を除く)、最終的に100人近くの参加青年と交流できたと思う。多くは異文化理解の個別ケースについての質問や、キャリア開発へのアドバイス、時にはICT関連の質問をしてきた人もいたが、おおかた役に立つ答えを提供できたのではないかと思う。異文化理解の教材については、一部、比較的簡単だと思った参加青年もいたようだが、年齢層が高く、かつ社会学、法学、政治学、経済学、科学などの分野で博士号や修士号を持っている場合、そのような印象を持って不思議ではない。一方で、最も若い年齢層で、学部的一年目を修了したばかりの参加青年の中には、特に英語の専門用語などが原因で難しく感じた人もいたようである。しかし全体として見れば、異文化理解セミナー委員会の公式報告書の内容を含め、多くの参加青年より、様々な方向に意識の幅を広げ、異文化理解のスキルを高める考え方やモデルのアイデアを得たことは、将来に役立てていけると感じたとこのフィードバックを受けることができた。

管理部門の方々の中には、今年の事業について全体的に改善の余地があるという考えをお持ちの方もいらっしゃるようだった。しかし、私の目から見ると、真面目でアカデミックなプログラムもあれば参加青年主導の自主活動やプロジェクトもあり、各国の特徴をいかしたプレゼンテーションやイベントで異文化への学びを深めることもでき、非常にバランスの良い構成に仕上がっていると思う。参加青年たちは各プログラムに積極的に参加しつつ(全体的に真剣に取り組んでいた)、さらに時間を見つけては、朝食前の早朝6時半から70年代ディスコで盛り上がりたり、各国主催のパーティー(私もよく参加した)が夜通し明朝まで続いたり、彼らが全ての活動に活発に取り組む姿勢が非常に印象的だった。

文化によって、「仕事や義務を優先し、楽しみはほどほどに」というレンズを通して世界を見ている人々もいれば、「楽しみ、良い時間を過ごすことを大切にし、そのような時間を過ごせるように仕事にいそむ」という

世界で生きる人々も存在している。個人的にどちらの考えが正しいかを定めるつもりはないが、船内には双方の見解が完璧なバランスで共存しているように感じられた。またそれによって、様々な文化背景を持って集った人々が互いの生きる姿勢、働く姿勢を観察し、互いから学ぶことを可能にしてくれる環境であったと思う。

全ての船内活動は、異文化への理解を深めること、協力・協業の精神を養い、リーダーシップとマネジメント・スキルを開発し、新しく得た知識とネットワークを自国

に持ち帰って、これらを活用しながら地域社会の発展に貢献できるようになる、という目的に沿って企画されている。SWY29は十分すぎるほどにこの目標を達成したと私は感じており、自分自身がその一員でいられたことを心から誇りに思っている。

また今回、光栄にもSWY29に参加する機会を賜ったことについて、内閣府並びに日本青年国際交流機構に対して、公式報告書のお借りして改めて感謝申し上げたい。



リーダーシップ・セミナー担当 アドバイザー評価

青木聡美

セッション1 (1月25日開催)

今回のセッションの目的は、リーダーとしての体験型学習の学びの旅に向けての準備とここで学ぶリーダーシップの特徴を理解してもらうことであった。これを目的に据えた理由は、体験型学習は、一般的にポピュラーな座学とは異なる学び方であるため、より効率よく学んでもらうために準備の機会を持つのが重要と考えたためだ。

終えてみての感想から、参加青年が期待するものと私の意図にギャップがあったことが分かった。参加青年の学ぶ意欲が非常に強く、特にすぐに適用するところへの期待値が高いことを知れて嬉しく思う。「体験型学習」の意図は、リーダーとしての意識が目覚め広がることにあり、「『分かる』から『できる』」への移行が速いためである。同時にセミナー中は、「体験型学習」のメリットでもある、身体を使ったり、心を開いて語り合うことを通して、楽しみながら学んでいる場面も多数見受けられたので、経験することの重要性は概ね理解いただいたと思う。

また、「『人から始まる』リーダーシップ」をより分かってもらう意図で、「役割としてのリーダー」と「人としてのリーダー」の違いも言葉にしておく。例えば、あるチームに役割として前に立つリーダーがいて、そのチームが取り組む課題があったとする。そんな際、そのリーダー一人のリーダーシップだけで解決していくことが難しい場合は多々ある。そんな場合、チーム全員がどの瞬間もリーダーであり、各々の本来持つ力を発揮しながら、前、後、横の立ち位置で力を合わせたら、そこでは何が可能になるだろう。「『人から始まる』リーダーシップ」の一つのイメージである。

特に、予測できない課題と取り組む際や、グローバルなリーダーとして様々な局面で対応していく意味においても、こういったリーダーシップの捉え方が有効であると考えている。こういったリーダーシップの発揮の仕方は、一旦理解しても、一朝一夕にできるようになるわけでも

ないため、実践し続けることの大切さも改めて記しておきたい。

次回以降はより応用できるツールを紹介していくので、更に実践に結び付いていくことを強く意図したい。

セッション2

今後2回のセミナーのテーマを「グローバルなリーダー」としての意識を高めるとした。今日は自分自身及び協働する周りに対する意識、次回は自分の意識を世界全体に広げるである。

最初に紹介した「チェックイン」も「人生の目的」も、一つ目の狙いである「(リーダーシップの発信源の)自分の状態に自覚的である」ことを促す。

参加青年が人生の目的を語る場合は、生き生きとしており、特に場が熱くなった瞬間は、人生の目的を詩にして朗読した時であった。「人生の目的」の解説直後に、外国参加青年の一人が申し出て、直感的に彼女の熱を感じて語ってもらった。

「人生の目的」は今日のキーワードが始まりであり、今後様々なリーダーシップを発揮していく中で磨かれ、どのような場面でも自分の本質からリーダーとして振舞えるようになることを強く意図している。

また、前回からの学びをコミティメンバーのファシリテーションで深めてもらった。自らの意見を誠実に語り、その話を熱心に聴き、それが「世界青年の船」事業のリーダーにとってどう使えるのか?という熱い討議が展開された。まさに全員がリーダーであることで何が起るのかが表現されており、すばらしいと感じた。

後半は、二つ目の狙いである「周りとの協働する際の自覚レベルを上げる」について、コーチングの哲学やツールを紹介した。リーダーとして、周りとの協働は不可欠である。

特に傾聴はリーダースキルとして自分の意識がどこに向いているかに気付ける非常に有効なツールである。例

えば、誰かの話を、より良い解を見出す意図でレベル1で分析しながら聴いていたとしても、相手は聴いてもらっていないと感じお互いのつながり感は希薄になることについてはあまり自覚的でない。一方、レベル2とレベル3を意識的に行ったり来たりしながら聴くことで、対話の中で革新的な発想が浮かぶこともあり、傾聴に精通することで、内、前、後、横全てのリーダーシップを発揮することの幅が広がると考える。

また、通常的意思決定は、ヒエラルキーあるいは経済的な力関係によるところが多い。一方、人々を巻き込みながらリーダーシップを発揮する際に、意見の対立が起こることはままある。「アラインメント」は、そこでお互いのやる気を削ぐ代わりに、知恵を出し合い、更に大きなビジョンに立った共通のスタンド（立ち位置）を見付けるプロセスであり、それを練習してもらった。

今回のセミナーは、波の揺れや、途中現れた南鳥島などのインパクトで記憶に残るものとなった。各々の参加青年が、自らが今幅を広げるべきポイントを明確にして、引き続き学びの旅を進めてくれることを強く願う。

セッション3

今回のセミナーのテーマは「グローバルなリーダー」として意識を自分から世界に広げるとした。また、プログラム開始以降の経験から来る学びを今後の具体的な活動につなげることを意図した。

前回のセミナー直後から、インフルエンザ発症により予定されていた活動が4、5日間ストップするという予期せぬ貴重な経験をした。その際の主催者側の制限のある中で、時宜を得たクリエイティブな対応からも参加青年は学んでいた。その後ナショナル・プレゼンテーションを始めとする数々の活動を終え、参加青年がSWY29に参加したそもそもの目的を思い出しつつあると、委員会のメンバーからのフィードバックや、参加青年の食事の際の会話などからも読み取れた。

その理解から、今セミナーの冒頭では、「前回のセミナー以降、どんなリーダーシップを認識したか」をグループ単位で話し合った後、全体で貴重な学びを振り返った。様々な活動を通して「全ての人々がどの瞬間も自分の本質とつながったリーダー」であつたら何が起こるのか、またリーダーシップの側面を意識的に変えてみたことからの学びや、失敗からも学ぶ様子がうかがえた。

前半は、これまでのセミナーで紹介したコーチングのスキル（特に傾聴）を使いながら、各々の「人生の目的」を深めてもらった。その際、自分が何者かを表すキーワードを選択する際に重要な「響く」という感覚が、単に感動的で楽しいだけでなく、時には心が震えるような痛みやショックとを感じる経験や「何かの役に立ちたい」という純粋な衝動であることを付け加えた。この演習の振り返りでは、リーダーとして自分自身の「人生の目的」の

物語とそのキーワードを発表する参加青年の姿に、リーダーシップの多様性も認識して、自分自身のリーダーシップについて自覚を新たにしようとした。

後半は、今後各自が取り組みたい社会的な課題に自覚的になるための演習を行った。意図は、自分自身の本質的なところから、自分が取り組みたい課題を明確にして、同じ問題意識を持つ仲間を見付けるのである。あえて既存の例を与える代わりに、SWY29を世界の縮図と見立て、参加青年の自らの問題意識を交換しあい、将来協働する可能性のあるパートナーを見付ける最初の一步となる演習を段階的に行った。

振り返りでは、いかに各々の問題意識が独特で幅広いものであるかを参加青年は認識したようだ。終了後、このセミナーはグローバルなリーダーとして現実の行動につなげる上で非常に良かったなどのフィードバックを受け取った。

今回のセミナー4を委員会メンバーが企画実行することを念頭におき、準備及び実施段階で積極的に協働した。その経験がセミナー4を創ってくれるものと信じている。

セッション4

今回のセミナーを始めるに当たり、私から委員会メンバーに情報として提供したものは、セミナー4の目的と前回のセミナーで回収した参加青年の個別の人生の目的及び世界に向けて取り組みたい課題に関する情報であった。委員会メンバーがこれまで体験を通して学んだ力を信じて自主性を重んじた。

準備段階の構想を練るミーティングで、「全ての人々がリーダー」であることを体現して臨んでいたことが印象的であった。具体的には、その時に議題を進めている「前からのリーダーシップ」を発揮しているリーダーが、船酔いで体調が優れないながらも参加しようとしているメンバーを誰一人もれることなく議論に参加できる配慮をしながら話し合いが進められていたことだ。まさに前からのリーダーシップの手法と言える。

セミナー当日の前半は、アイスブレイクに始まり、ビデオ鑑賞、詩の紹介、自己肯定感を高める言葉を全員で唱えるなど、参加青年の内なるリーダーを呼び覚まし当事者意識を高めたところで、誰でも前に来てリーダーとして個人の物語を語る場を設けた。

実際にどれだけの人がマイクを握ってスピーチをするかは予測不能だったと思う。その場を前からリードするリーダーは、「前からのリーダーシップ」をまさに体現していた。結果多くのリーダーがスピーチをした。前に出てきた参加青年の、格好悪い自分もさらけ出しながらの本質的で力強いスピーチに、聞いている参加青年も後ろからのリーダーシップを発揮し始め、お互いに純粋な認知をしあう呼び覚まされた場となっていった。これは、

リーダーとしての傾聴レベルや意識が広がった証拠でもあると考える。

後半は、前回の情報を元に、テーマごとにグループディスカッションが行われた。参加青年によって、具体性にはばらつきを感じたが、現実の行動に結びつくディスカッションになったグループも多々あった。

今後、参加青年が様々な分野で、自分のリーダーシップを発揮して現実化してくれることを強く意図する。委員会がそれを意図していたかどうかは定かではないが、全員が「その瞬間に自覚的に留まっていた」ことも、

勇気付けられる感動的なセミナーとなった大きな要素であったと認識している。時間が伸びた末の終了のアナウンスの際も、委員会メンバーは、揺れる船内の会場で、参加青年全員を大きな輪で包み込むように立っていた。経験を通して身体に蓄積された学びが発揮されていたと認識する。

改めて、リーダーシップ委員会のメンバーが、経験を通して学ぶ姿勢をあきらめず、「全ての人がリーダー」であるときに生まれる場を、参加青年の学びのために創り出したことを祝福と感謝で閉じたいと思う。



プロジェクトマネジメント・セミナー担当 アドバイザー評価

三好崇弘

背景と目的

SWY29は、船上及び陸上での様々な活動を通じて参加青年の能力を向上することを目的とし、参加青年は事業終了後に社会への貢献活動を実施することが期待されている。この事業終了後の活動を実施する能力を高めるために、「プロジェクトマネジメント・セミナー」が必要となり、アドバイザーとして参加することになった。

これまでの「世界青年の船」事業と同様に、今年のSWY29も多様なバックグラウンドと興味を持つ青年が参加した。青年たちの中にはプロジェクトマネジメント（以後PMとする）を全く学んだことのない人がいる一方で、他の参加青年は実際にプロジェクトを実施管理した経験がある。さらに参加青年の間には、純粋に文化交流を目的としている人がいる一方で、実務的な能力強化を求めている人がいるという状況であり興味は様々であった。よって全員に意義のあるセミナーを企画する上で、参加青年のバックグラウンドと興味の多様性は大きな課題であった。

このような状況を考慮し、以下のようなセミナーの目標を立てた。

- 1) 参加青年がPMについて興味を醸成するような内容にする。(学びのモチベーションを高める。)
- 2) なるべく実際的かつ個人的(身近)な事例を用いて、PMがビジネスだけでなく、参加青年の人生に有用であることを理解させる。

同時に、アドバイザーには参加青年で構成されるプロジェクトマネジメント委員会(PM Committee 以後PMCとする)が配置されていた。構成メンバーの数名にインタビューを通じて、PMC構成メンバーには、このセミナー開催を通じてPMについて学びたいというニーズがあることが分かったため、第三の目標も立てた。

- 3) PMCメンバーに船上セミナーを計画から実施まで

のプロジェクトとして運営管理を任せて、メンバーがPMの経験を通じてPMを学ぶ。

活動実施

上記の三つの目的を達成するために以下のような活動を行った。

1. 日本(陸上)でのPMセミナー

1月29日に235名の参加青年に対して導入研修を実施した。プロジェクト・サイクル・マネジメント(Project Cycle Management: PCM)の参加型計画の手法を紹介した。セミナーでは、参加青年を二人一組にして、参加型での研修を行った。参加青年は自分の実現したい夢や又それを阻む問題・課題について分析を行った。この研修を通じて、参加青年に、プロジェクト計画に必要な「関係者分析」「問題分析」「目的分析」「プロジェクトの選択」「ログフレーム(基礎のみ)」について学んでもらった。

2. PMCの活動

船上では、10名以上の参加青年がPMCの構成メンバーとして活動した。彼らはPMを学びたいという希望があったため、PMCメンバーには、実施予定のPMセミナーの目標を伝え、その目標を達成するための計画と実施を任せることにした。実施までに4回の正式なPMC会合と、数々の昼食及び夕食時での不定期な会合を繰り返して、計画を詰めていった。PMCメンバーの中には、セミナーの方針として、「教育」を目的(価値)とするグループと、「楽しみ」を目的(価値)とするグループがいた。それぞれの考えの違いを議論を通じて乗り越えて具体的なセミナーに組み替えていくことは、合意形成の良い経験となった。最終的に彼らは私自身も体験したことのないようなすばらしいPMセミナーを実施した。

この活動以外にも、PMCはSWY29にも貢献した。例えば、インフルエンザが発生し全体活動が制限されたときには、船内全体をつかって、キャビンごとの少人数グループで実施する「宝探し」ゲームを、全体の接触を避けながらも計画し実施した。このゲームを通じて、参加青年の船内キャビンに長くいることによるストレスを軽減させることに貢献した。さらに、各セミナーに対する参加青年によるアンケート（約200部）のデータの入力という手間のかかる作業をPMCメンバーが率先して行い貢献した。

これらの活動を行う際には、単なるお手伝いではなくPMの一つのプロセスとして認識させた。また、これらのアドバイスは、全て手紙という形で掲示板に掲示して、全ての参加青年にも読めるようにし、様々な活動がどのようにPMに関連するのかを説明して、PMを学ぶ機会とすることに努めた。

3. アドバイザー・セミナー（タイトル：My life and Project Management）

2月10日に3名のアドバイザーがそれぞれプレゼンテーションをすることとなり、自分の部分では、自分の人生についてPMに重ねながら紹介した。プレゼンテーションでは、自分の人生の成功だけでなく失敗についても具体的に紹介し、どのように自分の現在のキャリアまでにつながったのかを説明した。その中で「参加型ファシリテーション」「プロジェクト評価」「プロジェクトの構成」という実際のプロジェクトのスキル及びツールを紹介しながら、プレゼンテーションを行った。

4. アドバンス・セミナー（タイトル：PMBOK）

参加青年の中にはPMの高度な内容を求める人もいたため、アドバンスド・セミナーでは、PMBOK（Project Management Body of Knowledge）について紹介した。PMBOKはPMの事実上のスタンダードとなっている。PMBOKの内容は非常に多いもので一時間では完全に紹介するのは不可能である。そのため、PMBOKの内容をエッセンスのみに集約し、その中で参加青年が使えるもの（例えばタイムマネジメント）について身近な事例を使いながら紹介した。

5. 船上のプロジェクトマネジメント・セミナー

このセミナーは計画から準備、そして実施までPMCによって行われた。PMCへのアドバイスは逐次行った。セミナーは三つの幕からなるものであった。第一幕は、講義を中心にしたもので、SWOT分析からリスク分析までの広い範囲において、各ツールをPMCの別々のメンバーが発表した。第二幕は、船上でおきた架空の事件の犯人を捜すという「リアル・ゲーム」（ゲームを解くことがプロジェクトの構成となっている）を、チー

ムごとに協力しながら船上の部屋を使って実施する内容であった。第三幕では、社会的プロジェクトから個人的プロジェクトの六つの事例から一つを選んで、PMの知識レベルごとに分けられたチームごとに、具体的なプロジェクトを計画する参加型セッションであった。研修直後に実施されたアンケート調査によると、セミナーに対する参加青年の評価は非常に高いものであった。

6. キャビン内でのプログラム

インフルエンザ発生ときには、アドバイザーとして、キャビン内で実施できるプロジェクト計画のケーススタディ（ビデオ付）及び課題を提供した。この課題を実際に実施したキャビンから約10枚の計画が提出され、全ての提出課題に対して書面によるフィードバックを行った。

7. 参加青年へのアドバイス

数名の参加青年が不定期にプロジェクトについての個別の質問をしてきたため、それぞれに対してアドバイスを行った。一つの事例として、ある参加青年は徳島市での高校生への能力強化プロジェクトを計画しており、そのプロジェクトの具体的な計画作りをロジカル・フレームワークを使って指導した。

成果

計画された目標は以下のとおり達成できた。

- 1) 全ての参加青年（体調不良による欠席は除いて）がプロジェクトマネジメント・セミナーに参加し、セミナー実施後の評価アンケートによるとほとんどの参加者が内容について高い評価をしている。
- 2) プロジェクトマネジメント・セミナーは、「自分の夢を実現する」「リアル・ゲーム」「社会レベルから個人レベルまでの六つの事例」など、全て身近なかつ実務的な事例を活用して実施することができた。
- 3) PMCメンバーは船上セミナーを企画・計画、準備、実施から評価までの一連のサイクル全てを通じて、アドバイザーの指導の下で、運営管理し、この経験を通じて、プロジェクトを実施する体験をすることができた。

これらの一連の活動を通じて、全ての参加青年が少なくともプロジェクトマネジメントに対する基礎的な能力を高めることができ、それは、「世界青年の船」事業の終了後の各国での事後活動の実施の可能性を高めることに貢献したといえる。

上記の達成が可能であった一つの大きな要因は、この「世界青年の船」事業という最良の環境が、アドバイザーとPMCメンバーとその他参加青年との頻繁な交流を可能にしたためと思われる。さらに、プロジェクトマネジ

メント・セミナーと同時並行的に実施された数々のセミナー、リーダーシップや異文化理解、そして参加青年によるセミナーも相乗効果をもたらしたと言えよう。

来年度に向けた提言

上記のような成果が達成できた一方で、「世界青年の船」事業を継続する上で下記のような改善点が思料される。

1. 参加青年の明確な目的設定

参加青年の間のバックグラウンド（能力も含めて）や興味の差が非常に大きい。実際に会った参加青年がほとんどに明確な目標がないまま参加している。全ての参加青年に、事業参加「前」に具体的な目標を持たせる必要がある。「世界青年の船」事業は、参加・乗船すれば、参加青年に自動的に何か身に付いたりするようなプログラム構成にはなっていない。いわば、このプログラムの成否は、参加青年がどのようにこの機会を活用できるかにかかっている。参加青年の一部は、年齢が若かったりまた社会経験もなかったりするため、機会をいかす能力を持ち合わせてはいない。そのために、目標設定のための事前相談（カウンセリング）を提案する。

2. 会合及びセミナーのための船内設備

船内は会合やセミナーに使いやすい部屋の数が限られている。例えば、7階にあるリドテラスは参加青年のセミナーに頻繁に使われているが、温度調節がなく、明るさを調整するカーテンもなく、また作業デスクもない。多くの部屋には、作業デスクが付いていることはなく、会合ごとに事前相談しなくてはならず、開始時間も遅延する。PMC 会合では、作業や会合をするための場所探しに苦労することが多かった。もし、セミナーや研修が

「世界青年の船」事業の重要なコンテンツであるならば、学ぶ「場」についてはいつでも活用できるような環境を整備しておくことが必要と思われる。

3. 目標志向型のプログラム化

「世界青年の船」事業の目標は、文化交流から青年の能力向上まで非常に広い。この多様な目標というものが、事業の一つの特徴ともいえよう。しかし、この多様性は、具体的な目標（ゴール）を達成するための阻害要因となっている。全てのセミナー等のセッションが並行的に連続性もなく実施されているように見える。アドバイザーによる三つの分野（リーダーシップ、異文化理解、プロジェクトマネジメント）の研修でも目標やアプローチが統合されていない状況であった。今回はアドバイザー間で連携を自主的にとったが、次回はアドバイザーやコースのファシリテーターがより事前に連携をして、綿密な調整をすることが効果的なプログラムには必要と思われる。「世界青年の船」事業が具体的な目標を達成することを目指すのであれば、NP や PY セミナーも含め全てのセッションが、合意された目標に基づいて、「プログラム化」されることが必要である。

上記のような課題があるとはいえ、この30日以上のご共同生活を通じて、参加青年は多くのことを学び、また一生忘れられない思い出を作ったことは間違いなく、それは、参加青年の様々な能力を高めたことであろう。

今回、このような機会をいただいたことは大変に光栄であり、またこのような有意義かつ高度な事業を運営管理していただいた管理部の方々には、心から感謝を申し上げます。

各国ナショナル・リーダー評価

ブラジル連邦共和国

6年前自分が参加青年だった当時、「世界青年の船」事業への参加という機会に対し、生涯ずっと感謝の気持ちを持ち続けようと自分自身に言い聞かせました。この事業は私にとって人生の転機でした。世界がどれだけ大きく、多様性に富み、すばらしいものかを私に気付かせてくれました。

ナショナル・リーダー（NL）として再び太平洋を旅する機会を頂き、言葉にならない喜びを感じています。ブラジルが今後どのように成功し、発展していくかを世界に示すことができる優秀なブラジル参加青年団の一員

アドリアーノ・フランシスコ・カルバルホ・デ・リラ

となることができたことを嬉しく思っております。

人生を変えるような経験ができるこの事業に招待してくださった内閣府、日本国政府に対し、ブラジル参加青年団を代表して、深く感謝申し上げます。

11か国の参加青年と約2か月を共にし、互いに学び、教え、笑い、泣き、会えないときは寂しさを覚え…そして私達は花開きました。

遠距離を乗り越えて：事前研修

SWY29 ブラジル参加青年団は異なる9都市から集結

しました。

今回、参加青年の選考を行い、出発前研修にも御協力くださいました在ブラジル日本国大使館に感謝申し上げます。

それぞれがブラジル国内で離れた場所におりましたので、日本へ出発するその日まで全員が集まることができませんでした。

この距離の問題を解決し、参加青年団としての事前準備のために、私たちは毎週日曜日にテレビ会議を行うことにしました。テレビ会議を通じて、ブラジル参加青年は活動内容やナショナル・プレゼンテーションについて、クラブ活動そして事業の総合的な理念について学びました。この3か月の準備を経て、ブラジル参加青年団は日本へ向けて旅立ちました。

日本でのスゴイ時間

成田空港に到着すると、青年たちが口をあぐりと開け、呆然としていることに気がきました。みんな、自分が日本にいること自体、信じられない状態でした。ブラジル参加青年の中には5人、日本語が話せる青年がいましたが、殆ど全員が日本に来るのは初めてでした。その後、この事業で最も印象深い活動の一つである地方プログラムでウクライナ参加青年団と共に山口県を訪れました。神社を訪れたり、茶道、着物の着付けを体験し、二泊のホームステイを経験しました。山口県では日本の人々の優しさ、温かさに触れることができました。

東京に戻り、国立オリンピック記念青少年総合センター（以下、オリンピックセンター）でついに日本参加青年と合流しました。新しい仲間と出会い、事業開始の準備が整いました。そして、いよいよ、この事業の本質が何かを理解するようになりました。

無限なる遥かかなたへー 乗船期間

それほど寒くはない晴れた日の午後、横浜に着くと、参加青年の期待が高まっていくことを感じました。全員がにっぽん丸に乗船することを心待ちにしていました。

事業期間中、セミナー、コース・ディスカッション、クラブ活動、自主活動を行いました。ここで学んだことが良きリーダーとなる糧になると私は確信しております。

そして美しい国々、バヌアツ、アオテアロア・ニュージーランド、フィジー及びソロモン諸島に寄港しました。様々な活動、訪問、そして乗船中から始まった友情は、参加

青年全員の人生で最高の出来事の一つとなるでしょう。

ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションを2部構成にしたことにより時間を節約し、参加青年の負担も軽減できたと思います。ナショナル・プレゼンテーションのために多くの時間を費やし、努力致しましたが、努力した分の楽しみがありました。

提案とまとめ

この「世界青年の船」事業は参加青年全員にとってすばらしい機会であると強く信じております。しかし、この事業が参加青年全員にとってより意義のある事業となるための改善の余地はあると考えます。

最初の寄港地であるバヌアツへ向かう途中、SWY29最大の課題であったインフルエンザに直面しました。ウイルスの拡散予防のため、公式プログラムを数日間変更しました。幸いにもこの状況を乗り越えることができました。しかし、「インフルエンザの恐怖」から常に逃れることはできず、次、いつ活動が変更になるのかという緊張感がいつもありました。全員の健康に配慮するという観点は理解します。しかし、このような事態においても参加青年の満足度が最優先事項でなくてはならないと考えます。

寄港地、特に給油・給水地（バヌアツ、ソロモン諸島）においてももう少し長い時間があれば良かったと思います。訪問国を探検しながら、家族と連絡を取る時間を確保するには時間が限られていました。以前のようにもう少し長く滞在できれば良いと思います。

最後に、参加青年の間でもっと交流する時間が必要でした。スケジュール内に全ての活動を組み込むことの大変さは理解していますが、この事業の参加青年としての醍醐味である「人とつながる」ということのための自由時間がもっと必要であったと考えます。

最後になりますが、ブラジル参加青年団を代表し、このすばらしい経験をさせていただいたことに、改めて深く感謝申し上げます。事後活動を通して社会に貢献し、SWYAA ブラジルをより強化していくことを楽しみにしています。

ありがとうございました。オブリガード。

カナダ

ヘンリー・ツァン

「船旅、それこそが大切なのだ」

SWY29の参加国としてカナダが選ばれましたことは、

大変な栄誉でした。12人のカナダ参加青年は、2017年1月17日から3月3日までの間に日本へと旅し、更に11か国240人の参加青年と共に太平洋を航海しました。

参加国はカナダのほか、ブラジル、コスタリカ、エジプト、フィジー、インド、ケニア、ニュージーランド、トンガ王国、ウクライナ、そして日本です。

参加青年団

在カナダ日本国大使館とSWYAAカナダは共同で、11人の参加青年と1人のNLを選出しました。書類審査や自己紹介ビデオ、更に面接などいろいろなプロセスを経て、全国からの300人以上の応募者の中から以下のメンバーが選出されました。ヘンリー・ツァン（NL）、ケビン・コバヤシ（ANL）、ステファニー・シャイラク（ANL）、ジェニファー・ウィテカー、キラク・エニユアラク・ストラウス、マティカ・ローゾン、ガブリエル・トランブレイ、エステファニア・ボルハ、デイヴィッド・リプトン、ムサ・セン、リム・ラセン、サリーマ・フセイン。

出発前活動

9月から1月までの間、私たちは毎週電話会議をし、ナショナル・プレゼンテーションやスポンサー探し、公式ギフトのこと、民族衣装、名刺、デリゲーション・パーティーなどのことについて話し合いました。1月13日にメンバー全員がトロントに集合して16日までの間SWYAAカナダの主催で出発前研修を受け、その後ピアソン国際空港から全員で羽田空港に向けて出発しました。トロントでの研修期間中には、SWYAAの委員会メンバーやいろいろな回の既参加青年に会うことができ、貴重なアドバイスをいただきました。研修中には、様々なアイスブレイクやワークショップを通してチームの絆を強め、また船上での様々なアクティビティの準備をしました。

福井県でのホームステイ

カナダ参加青年団は福井県福井市を訪れました。ホストファミリーに迎えられ、様々な観光名所を巡り、地方の生活を体験しました。福井県は日本で「一番幸せな県」とされているほか、世界レベルの恐竜博物館を抱えるなど古生物学的にも有名などころです。西川一誠福井県知事を表敬訪問したほか、福井県立大学の学生たちと意見交換する機会もありました。

陸上研修

その後、私たちはオリンピックセンターに移動し、船上での研修に備えてワークショップやオリエンテーショ

ンを行いました。1月28日に行われたナショナル・プレゼンテーション第1部では、カナダを多文化と多様性の国であると紹介し、更に環境問題と先住民に関する話題にも触れました。この研修期間中には、レター・グループごとに秋葉原や渋谷、原宿、新宿など東京都内のいろいろな場所に行くこともでき、滞在地を知る良い機会となりました。さらに、コース・ディスカッションごとに日本航空株式会社、NPOカタリバ、Church World Service Japan、池袋防災館、独立行政法人国際協力機構、公益財団法人オイスカ、特定非営利活動法人パルシック、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）などいろいろな団体を訪れて、様々な活動について学びました。

船上活動

船上では、アドバイザー・セミナーを通してリーダーシップの基本能力など多くのスキルを得ることができました。コース・ディスカッションでは、分野ごとに重要な知識を習得できました。PYセミナーやスキルセミナーは、参加青年仲間から学ぶ機会となりました。また自主活動では、各国間で知識を共有することができました。デリゲーション・ナイトでは、それぞれの国の文化のいくつかの側面を紹介することができました。カナダ団は、情報掲示ブースやゲームを通して、主にカナダの寒い冬と多様性の文化について紹介しました。

寄港地

寄港地となったニュージーランドのオークランドとフィジーのスパで、私たちは地元の文化について多くのことを学びました。また、課題別視察では、様々な分野で活躍する団体の活動を見学し体験することができました。

提言

- 参加青年間のコミュニケーション：船上での最大の問題とも言えるのは、参加青年間の共通語である英語でのコミュニケーションです。各国の参加青年の英語レベルには大きな隔たりが見られました。この状況に対応しようと、事業中にはカナダ参加青年の参加の下でコネクション委員会が作られました。
- 自主活動：多くの参加青年は、参加青年間の交流から多くを得ました。自主活動や参加青年間の交流に更に多くの時間を割くことで、より豊かな経験が得られるようになるでしょう。

「愛の力が権力欲を上回ったとき、世界には平和が訪れるだろう」

ジミー・ヘンドリックス

冒険の始まり

参加青年の選考と本国での準備

コスタリカでは、事業の1年前に日本国大使館、コスタリカ青年協議会、そしてSWYAAコスタリカが集まり、参加青年の選考方法を決定するところからSWY29へのプロセスが始まりました。その後、非常に厳しい審査を経て、11人のとても優秀な青年リーダーたちが選出されました。

本国での準備はとても充実しており、船で出会う全ての人たちにコスタリカとそこに住む人々のことを覚えてもらえるようにと、入念に行われました。4か月にわたって毎週ミーティングが行われ、参加各国について勉強したほか、寄付集めイベントの企画やスポンサー探しをし、ナショナル・プレゼンテーションの練習や各種セミナー、そのほかの活動の準備をしました。また、植林活動への参加や動物保護センター訪問も準備活動として行われました。個人個人の役割と、コスタリカ参加青年団としての役割についても検討されました。

出航前研修と地方プログラム

日本に到着してすぐに、これまでの努力が意味のあるものだったと感じました。そして他の参加国の青年たちと知り合い、感激の気持ちが高まりました。到着後ほどなくして、私たちはフィジーの参加青年と一緒に、地方プログラムとして京都を訪れました。京都は、その美しさと歴史と伝統で人々を魅了する場所です。ホームステイでは、日本の御家族の一員として迎えていただき、地元の人々の視点から見た日本を知る機会を得たと同時に、「おもてなし」の真の意味を学ぶことができました。

東京に戻ってからは、NYCでの研修や、いくつかの歓迎式、そして安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問や皇太子殿下の御接見などがあり、この事業の重要性と、将来のリーダーである私たちへの日本の期待を感じるものとなりました。

船上生活

ブラ・ビダ精神に火をつける

船上での公式プログラムは、リーダーシップの様々な側面に脚光を当てるために、そして話合いや議論、異文化理解を促進するためにとても丁寧に計画されていました。各種セミナーやコース・ディスカッションは、学術的な内容を扱う場となっていた一方で、クラブ活動は

様々な国の文化や伝統に触れる機会となりました。

コスタリカ青年代表団にとってリーダーシップとは、私たちの内面から炎のように燃え出し、私たちの情熱と行動を引き出すものです。この考え方を基に、私たちの船上での使命は、皆の持つプラ・ビダ精神に火をつけることでした。それは、リーダーシップを培うという意味でもあり、またそれぞれの中にあるtico（コスタリカのなもの）を見付け出すということでもあります。私たちは、公式行事へ積極的な参加や、四つのセミナーでの知識や能力の共有、ナショナル・プレゼンテーション、一つのクラブ活動、そしてコスタリカコーヒーの紹介とフェアトレードに関する話合いをする「カフェアータ」という企画などを通してこの使命を果たすべく努力しました。なんと言っても私たちが大切にしたのは、幸せの感覚とエネルギー、そして温かさを共有することでした。もちろんたくさんのラテンダンスも。

寄港地

今回の事業では、寄港地としてニュージーランドのオークランドとフィジーのスパを訪れました。これらの寄港地でも、そして給油地として訪れたバヌアツとソロモン諸島でも、SWYAAや当該国政府の示してくださったエネルギーと受入準備に対して参加青年は心から感謝し感激しました。その準備のおかげで、私たちは寄港地の歴史や文化、そして地域の抱える課題についてより深く理解することができました。

ニュージーランドでの活動のハイライトの一つはオラケイ・マラエ訪問でした。私たちは、そこで伝統的な訪問者を歓迎する儀式「ポウヒリ」を体験すると同時に、マオリの人々の勇敢さを学ぶことができました。表敬訪問では青年開発省青少年大臣とお会いする機会を得ましたし、学校訪問では子供たちとの交流もできました。私たちとの交流が、子供たちの中に将来のリーダーになりたいという気持ちの種を蒔けたことを願っています。

フィジーに到着するとすぐに、皆さんが大きな笑顔と共に「ブラ！（こんにちは）」と言って私たちを出迎えてくださり、人々のとても友好的な人柄に感激しました。企画されていた行事は、どれもその前の行事をしのぐほど思い出に残るものとなりました。首相表敬や大統領による訪問、ボードフォンアリーナでのカルチャーナイトもそうですし、村訪問もその際立ったものでした。村々では、伝統的な「セブセブ」という儀式が行われたほか、たいへん美味しい「ロボ料理」も作っていただきました。地元のメディアも、私たちの訪問を入念に取材していました。

太平洋島諸国の人々が海面上昇や自然災害、海岸線の

浸食などの問題に直面していることを知りましたので、私たちは気候変動対策を進めることを本国へ持ち帰るメッセージにしたいと思っています。

提言

日本国政府内閣府及び日本青年国際交流機構の多大の御尽力により、参加青年の質や各方面で持つ専門性は目覚ましく高まっています。PY セミナーやスキルセミナー、自主活動などは、その価値や質が高かっただけでなく、参加青年間の語り合いを進めるものとなりました。このことを考えると、参加青年自身が公式活動の設計にもっと積極的に関わるよう促し、それぞれの持つ知識や背景を共有する場をもっと増やすことを提言したいと思います。

改善の余地のあるもう一つの点は、外国参加青年と日本参加青年の専門性の高さの差があり過ぎるという点です。事業名が「次世代グローバルリーダー」となっていることから、参加各国のSWYAAは、国内の最も優秀なそして各分野で一定以上の経験を持つ候補者を選ぶべく努力しており、選ばれた参加青年はグローバルな課題について高いレベルでの議論を期待して日本へやってきます。それに対して、日本参加青年の多くにとって「世界青年の船」事業はリーダーシップについて初めて学ぶ場であり、主に文化交流の能力を高める場になっていま

す。このようなギャップの中で両方の期待を満たすことは大変難しいものです。内閣府が、この事業の対象とする日本参加青年像をしっかりと設定すること、そして経験の高い参加青年も事業から十分な学びを得られるよう、経験値の高い参加青年の役割を再検討することが大変重要だと考えます。

世界が必要としているのは私たち

人生に一度の冒険

このすばらしい事業にお招きくださいましたことに対し、コスタリカ参加青年を代表して日本国政府、管理部の皆様、SWY29関係者の全ての皆様に心から感謝の意を表します。事業に再び参加できたこと、そしてNLという立場をいただけたことは、私にとって本当に光栄なことでした。

文化の違いは人々の間に壁を作り出すのが普通ですが、この事業では私たちを団結させるものになっており、それはとても力強いものです。私たちは壁を作るためではなく壁を崩すべくここに集いました。壁とは、不平等や差別、不公正、そして無関心です。「世界青年の船」事業は、国々が一つになる本当に特別な場所なのです。

「世界青年の船」事業とそれが長年にわたって世界に作り出してきた人的ネットワークは、必ずやより良い社会の構築に貢献していくことでしょう。

エジプト・アラブ共和国

ジョイ・ガリ

「あなたは海の源まで行ったことがあるのか。深い淵の奥底を歩き回ったことがあるのか。」

—旧約聖書ヨブ記 38 章 16 節

海は、ずっと私のインスピレーションの源です。穏やかな海も荒れた海も。東の海の端から登った太陽が西の水平線に沈んでいく。そして青色の変化が深さを映し出しながらも、その奥深さは底知れない。

「世界青年の船」事業は、私とエジプト代表青年団の全てのメンバーに、にっぽん丸という船の上で多文化のモザイクのような人類の多様性を体験する機会を与えてくれました。同時にそれは、私たち自身の内面に触れる時でもありました。間違いをし、それを直す過程を経てそれぞれが円熟していく旅とも言えます。

全ての始まり

エジプト政府青年スポーツ省が、この事業の告知をしたのは2016年の初夏のことでした。その後、参加申請書が届き、1次審査を経て6月と7月に面接が行われました。

NLの選考においては、エジプトSWYAAからの推

薦で、第16回事業（2004年）参加の既参加青年と、第22回事業（2010年）参加の私が候補として挙げられ、青年スポーツ省での面接とカイロの日本国大使館での面接がありました。エジプト団の参加青年とNLは、最終的に日本国大使館によって決定されました。

エジプトでの準備

エジプト代表青年団は、事業中の様々な活動でのエジプト紹介を準備するためにカイロで数回の準備会を開きました。2016年10月の東京でのNL会議から帰国後、私は青年スポーツ省と会合を持ち、エジプトを紹介する上での適切な方法について話し合いました。紹介に必要なものは、寛大にも全て同省が費用を負担してくださいました。

12月には、青年スポーツ省の主催で2回の合宿が行われ、ナショナル・プレゼンテーションでの伝統舞踊の振り付けを専門の振付師から習いました。同合宿では、エジプトSWYAAからも大きな支援があり、参加青年は事業での様々な活動について事前に学ぶことができました。

ホームステイと出航前研修

2017年1月17日に日本に到着すると、東京のANA インターコンチネンタルホテルに二泊し、18日には公式歓迎会がありました。

19日から22日までは福井県を訪れ、恐竜博物館を見学した後、ホームステイ先の御家族に受け入れていただきました。ホームステイは、伝統的な日本の生活と直に接し感じる機会となりました。

22日に東京に戻ってからの1週間は、オリンピックセンターでの陸上研修でした。

研修内容

研修の一部は、NYCで始まり船上へと続きました。他に、船上のみの活動もありました。

コース・ディスカッション

今年度の事業では、以下の各テーマについての理解を深めることを目的に六つのコースが設定されました。また、各訪問国での課題別視察も更に理解を助めました。参加青年は、以下のコースの中から希望順位を提出することができました。

- ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現
- 平和構築のための対話型アプローチ
- 防災活動のための人材育成
- 国際貢献活動
- 責任あるツーリズム
- 青年のエンパワメント

アドバイザー・セミナー

下記のテーマに関する専門家である3人のアドバイザーが、それぞれ数回のセミナーを行いました。

- 異文化理解
- プロジェクトマネジメント
- リーダーシップ

PY セミナー

希望する参加青年が、自分で選んだテーマに関して他の参加青年に関心を持ってもらうべく、セミナーを開催しました。

スキルセミナー

事後活動にいかせる様々な能力についてのセミナーが、参加青年によって行われました。

ナショナル・プレゼンテーション

各国2回のプレゼンテーションを行いました。1回はNYCでの口頭による発表でした。もう1回は、にっぽん丸船上でのパフォーマンス形式のものです。

デリゲーション・ナイト

各国は個別で、又は他国との共催で、各国のパーティーや食文化を紹介するイベントを開催しました。

クラブ活動

各国の参加青年が、他の国の参加青年に文化的な物事を手ほどきする企画を準備してきました。

レター・グループ

参加青年は、AからKまでのレター・グループに編成されました。各グループの半分は日本人、残りの半分は各国1人ずつの非日本人という構成になっており、これは各国の参加青年間の交流を促進することをねらいとしています。各グループには、NLが1人付き、グループを取りまとめます。

委員会

事業中の各研修項目では、参加青年がその準備・進行・発表などを担当するようになっていきます。委員会は下記のとおりです。

- ナショナル・プレゼンテーション
- イベント
- PY セミナー
- スキルセミナー
- 異文化理解
- プロジェクトマネジメント
- リーダーシップ
- イベント
- クラブ活動
- コース・ディスカッション
- 寄港地活動

寄港地

にっぽん丸は、様々なレベルでの異文化理解を更に深めるため、ニュージーランドのオークランド市とフィジーのスパ市に、それぞれ三日間寄港しました。どちらの寄港地でも、文化と伝統の交流がありました。各寄港地では、コース・ディスカッションごとの課題別視察も行われ、それぞれのテーマについてより広い視野から学ぶことができ、更に日本、ニュージーランド、フィジーの各国で、それぞれのテーマがどのように扱われているかについても、様々な体験から学びました。

終わりに

「世界青年の船」事業の体験は、学びの機会であると同時に、自分自身についての内省の場でもあります。各参加青年は人類という大きな集まりの構成要素であり、それぞれがより良い暮らしや相互理解、そして共に生きる社会作りに貢献できるのです。

この事業は、世界の国との間の平和を作り出すものです。この事業を継続されている日本国政府内閣府に心から感謝いたします。また、エジプト代表青年団を支えて

くださいましたエジプト政府青年スポーツ省とエジプトSWYAAにも謝意を表します。

フィジー共和国

ラヴィネッシュ・ブラサード

はじめに

フィジーが今回、SWY29の参加国として選ばれたことは、大変光栄でした。フィジーの若者たちは頻繁にこの事業の話をするのですが、毎回応募する人がとても多く、参加青年として選ばれるのは容易ではありません。一番優秀な人だけがそれぞれの選考過程を経て、「世界青年の船」事業のフィジー代表として選ばれるのです。フィジーの参加青年のほとんどは同じ町の近くに住んでいるので、事業参加の準備をするために前もって何回か会いました。その打合せを通してそれぞれのメンバーが仲良くなって、興奮感が抑えきれないほどに高まりました。何人かの参加青年にとっては初めての海外で、日本に行くのはNL以外全員初めてでした。フィジー政府の青年スポーツ省にサポートしていただき、ほとんどの費用を負担していただきました。我々はこの事業への参加に感謝しているとともに、ここで築いた思い出と友情は一生続くだろうと信じています。

地方プログラムとホームステイ

フィジー参加青年団は今回、コスタリカ参加青年団と一緒に京都府でホームステイをしました。京都府知事に温かく迎え入れていただいた後、様々な観光地の訪問や地元の青年との交流、日本の文化や伝統の体験を楽しみました。その後、いよいよホストファミリーと会う時が来ました。ホームステイの思い出はずっと忘れることなく、私たちは心の中で大切にしていきたいと思います。三日間一緒に過ごしてとても仲良くなったので、最後にホストファミリーと別れるのは本当に辛かったです。

陸上研修 (NYC)

既参加青年なら誰でもNYCの思い出を大切にしているようですが、その理由がはっきり分かりました。NYCで初めて他の参加青年団と出会えたからです。初めてみんなと出会い、一緒にセミナーに参加し、一緒に食事をしたほか、コース・ディスカッションのグループにも会いました。11か国から来た様々な人たちが互い打ち解けていくのを見るのはすばらしかったです。中にはとても早く仲良くなった人もいました。クラブ活動の紹介などで、それぞれの文化の紹介が盛り上がりました。NYCでのプログラムは「世界青年の船」事業の大事な第一歩であり、船上生活への導入です。この段階での参加青年の生活は多少制約されていましたが、船上研修の時より

まだ自由で、東京の観光地を訪問したりする機会もあったため、徐々にスケジュールに慣れることができて良かったですと思います。安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問と皇太子殿下御接見もさせていただけました。部屋の狭さ、食事の種類や門限などについて不満もいくつかは出ましたが、それにしても私たちは皆NYCを好きになって、最後にそれぞれの国に帰る時は恋しくて涙が出てしまうほどになったと思います。

船上生活

初めてにつぼん丸に足を踏み入れた時、自分と違う文化から来た人々と交流し、新しい環境や制限などに慣れないといけなことを知っていたので、緊張でワクワクしていました。多くの手続きを経て出航した後、私たちはそれぞれのキャビンに割り振られ、キャビンメイトに会いました。全てのプログラムや自主活動はきちんと計画されて、ちゃんと時間どおりに実施されました。船内の密集した空間の中では同じ人と何回も会うことになるので、とても早く仲良くなるのです。コースの内容もとても勉強になり、次世代のリーダーとしてこれから役に立ちそうな知識がたくさん含まれていました。

寄港地

今回のSWY29の寄港地はニュージーランドのオークランドとフィジーのスバの二箇所でした。それぞれのプログラムや施設訪問はとても楽しく有意義で、各国SWYAAの方々が各寄港地の活動をサポートしてくださいました。ニュージーランドでのオラケイ・マラエの歓迎式とフィジーでの村訪問は参加青年にとっても高く評価されました。本当に勉強になりました。給油・給水のためにバヌアツとソロモン諸島も訪問することができました。我々フィジー参加青年団は色々なところを回って、とても楽しかったです。

最後に

世界中の全ての青年が「世界青年の船」事業に参加できたらいいと私は昔から思っています。もちろん、それは色々な理由で不可能だとは分かっています。お金の問題もありますし、これほど大きな船はどこにもないでしょう。それだけに、母国の代表としてにつぼん丸での生活を楽しむ機会を与えられた我々にとっては、人生に一度しかない貴重な経験になりました。船上生活を通し

て、自分自身を信じながら、この世界に共に暮らしている人々に対する敬意の示し方を学び、社会を変えるためのツールを手に入れることができました。一生続く友情、ずっと大切にしたい思い出、そしてこれから出会う人々に伝えるべき大切な知識も得ることができました。広い心と、リーダーとしてこの世界を変えるための自己犠牲の精神を持っている青年には、「世界青年の船」事業への参加を心から勧めたいです。

インド

平和憲法の理念と、世界の若者たちのリーダーシップを推進しようとする日本国政府内閣府の信念が、「世界青年の船」事業というこの独特な事業の理念に具現化されています。それは、ただ単に異文化に接してそれを楽しむ場というものではなく、その奥にはビジョンがあるのです。それは、より統合的で受容力のあるアイデアやコンセプトについて話し合い共に体験するような「場」を作り出すというものです。この事業が最も大切にしているのは、一言で言えば、全ての文化の様々な側面をより豊かにするような多様性です。

ニューデリーにおける出発前の準備

インド代表青年団のメンバーはインドの各地域から選出されており、更に出発までに最低1回は全員で顔を合わせることが定められていましたので、私たちは出発の20日前に、首都ニューデリーで会合を持ちました。

事業

日本に到着すると、ルポール麹町で温かく迎えられ、その後地方プログラムへと出発しました。この地方プログラムは、私たちの心に残る、事業中でも最高の思い出の一つになっています。日本でのプログラムは、とてもうまく計画されており、近代的な面と伝統的な生活の両面を経験することができました。例えば、都内視察では、先進国として日本がたどり着いている高みを見ることができましたし、ホームステイでは日本の伝統的な生活に触れることができました。

インドでは、現政権と日本国政府との連携で新幹線を含むいくつかの開発計画が開始されようとしています。そんな中で、その新幹線に日本で乗ることができ、大変うれしかったです。私たちは、ニュージーランド代表青年団の仲間、そしてIYEOの方々と共に、筆づくりの里を訪れました。その後、私たちは広島へと移動しました。広島平和記念資料館への訪問は、私にとって人生を変えるほどの大きな体験でした。海外からの訪問者には、誰でも一度はこの資料館を訪れるよう、日本国政府が働き

我々フィジー参加青年団はこれから地元でこの事業を広報するとともに、それぞれの地域に貢献することをとても楽しみにしています。そして何より、我々の得た学びと知識を使って世界のSWYネットワークに貢献することを通して、日本国政府への感謝の気持ちを表していきたいと思っています。

ビナカ・ヴァカレブ、ありがとうございました。

サティヤ・ランジャン・スワイン

かけることを提言させていただきたいと思います。

ホームステイ

日本の生活様式に身近に接するため、日本人の御家族に滞在する機会を与えていただきました。私たちインド団のメンバーは、誰もこれほど日本文化と身近に接したことはありませんでした。日本の方々には完璧主義者だと気付かされましたし、多くの学びを得ました。地方プログラムの最後に、受入家庭の両親が見送りに来てくださった時には、心から感激しました。

表敬訪問

NLとANLは、皇太子殿下と安倍晋三首相にお会いする機会を頂き、より良い世界の実現に向けて努力するよう励まされました。

陸上研修

東京ではオリンピックセンターに滞在し、そこで陸上研修が行われました。様々な研修活動への導入が行われ、この後の事業に備える機会となりました。

船上

陸上研修を終え、ついにはつぼん丸に乗船した時には、皆心からワクワクしました。つぼん丸船上の雰囲気は、まさに独特の世界です。そして、11か国の参加青年240人それぞれが、この本当に独特な事業を作り出しているのです。メンバー一人一人が文化的にとっても多様ですし、外界との接触は完全に遮断されているのです。期間中、数人がインフルエンザに感染して拡大が心配されたため、管理部は数日間の活動停止を決定しました。参加青年にとっては試練ともなりましたが、その必要性を理解し、最大限管理部に協力しました。NLと管理部員とで行ったナイト・パトロールは楽しくもありました。

私が一番心を動かされたのは、NLミーティングでした。このミーティングは毎日開かれ、様々な決定がなされ、そこでルールも決定されたのですが、管理部から押し付けられたことは何もありませんでした。

モーニング・アッセンブリー

モーニング・アッセンブリーでは、各国の国歌が流れ、国旗が掲揚されました。この場合は、参加青年が他国に対する敬意を深めるものになりました。また、モーニング・アクティビティも行われました。これは本当に楽しく、創造性を発揮する場でした。

アドバイザー・セミナー

異文化理解、リーダーシップ、プロジェクトマネジメントの三つのセミナーが行われました。中でも、異文化理解セミナーは、学ぶ点が多く、たくさんの共有も行われたので、特に興味深かったです。

コース・ディスカッション

参加青年が、特定の課題分野に関する能力を身に付けられるよう、コース・ディスカッションが設定されました。「平和構築のための対話型アプローチ」、「責任あるツーリズム」、「青年のエンパワメント」など、大変興味深いコースが準備されていましたが、次回に向けてファシリテーターには担当分野に関して更に深い経験と知識のある人を選定するよう提案したいと思います。学識的な面では学ぶものがわずかしかなかったかもしれません。少なくともインドでは、これらのテーマに関しては非常に高いレベルでの議論がなされています。ですから、内容の改善を是非ともお願いしたいです。もう一つは、コース・ディスカッションでは、計画に時間がとられ過ぎていて、実際の活動の時間が短かったと思います。これは、逆であるべきと考えます。参加青年のした作業に対して掲示板で公に感謝されていたのは、とても良いことだと思いました。

相互理解を培う

参加青年と管理部の間には、良い関係が成り立っていました。同じく、NLも皆とても協力的で、良い関係を保っていました。スポーツ活動や、ナショナル・プレゼンテーションの準備、そして夜遅くのパーティーなどが、参加青年をつなげる良い場となっていました。船内でひとときわすばらしかったのは、にっぽん丸クルーの方々が参加青年にとっても丁寧に接してくださったことでした。

ナショナル・プレゼンテーションとデリゲーション・ナイト

各国への理解を深めることを目的に、ナショナル・プレゼンテーションとデリゲーション・ナイトが企画されました。インドのナショナル・プレゼンテーションは、他の国とかなり違っていました。踊りや歌を中心とするのではなく、ある中流家庭の様子を寸劇にして、インド人の生活の様々な面を紹介し、その中に新旧の踊りや歌

も取り入れました。インドのデリゲーション・ナイトも良く準備できたと思います。そこでは、インドの食べ物や飲み物、様々な民族衣装など、あまり堅くない側面を紹介しました。

寄港地

ニュージーランドとフィジーの二つの寄港地がありました。寄港地では、コース・ディスカッションごとの活動や視察が行われました。ニュージーランドでは、マオリの文化に触れたほか、学校訪問もありました。

フィジーでは、コースに関連して国会や南太平洋大学などを訪問しました。最も興味深かったのは、村訪問でした。人と自然との結び付きが、とても美しい形で表現されていました。一方で、教会に行ったことに関しては、何人かの参加青年が不愉快さを感じました。宗教は個人の内面に関するものですので、次回以降は教会を含めて宗教施設の訪問は避けることを提案します。

私たちは、バヌアツとソロモン諸島にも立ち寄りしました。どの国でも、SWYAAのメンバーとの交流は本当に心温まるものでした。

自主活動

参加青年の持つ専門性や興味に応じて、様々な活動が行われました。政治について語るものもありましたし、映画鑑賞もありました。インド青年は、政治に関心のある参加青年と交わるべく、「政治について語ろう」という企画を立てました。その他にも、各国の参加青年は、「コネクション委員会」や「SWYブラザーズ」など様々な興味深い活動を立ち上げていました。「SWYタレントショー」もとても面白かったです。この企画には大勢の参加青年が興味を示して参加し、舞台上立って芸を披露しました。

2017年1月26日には、インド共和国記念日を祝いました。その場には、管理部のほとんどの方々と、ほとんど全員の各国参加青年が参列しました。共和国記念日を海外の地で祝えたのは大変すばらしいことでした。

クラブ活動

参加青年による様々なクラブ活動も行われました。一つのクラブで、日本参加青年も各外国参加青年もがインドの民族衣装を着て、ボリウツの歌に合わせてインド風に踊っているのを見た時には、とてもうれしくなりました。また、参加青年が日本の習字や、ラテンダンスをこなすようになるのを見るのもうれしいことでした。これらの活動の企画や進行を通して、参加青年間のチームワークが培われ、各自のリーダーシップも強化されました。

未来に向けて

事業の成果は、各参加青年が行っている、又は行うことを計画する事後活動によって評価されます。事後活動セッションで、参加青年から様々なすばらしいアイデアが出されたことにはとても驚きました。事後活動とは別に、65か国の既参加青年をつなぐ「HumHub」というソーシャルネットワークも開設されました。

事業期間中に、インド団のメンバー2人が病気になりましたが、管理部の方々が思いやり深く対応してくださいました。今後は、少なくとも3人の経験ある医師と看護師からなるチームが乗船されることを提言いたしま

す。毎回検査結果に頼って判断するのではなく、症状から適切に判断できる専門家が必要であると考えます。

最後になりますが、インド団を代表して、この事業を成功裏に実施された日本国政府内閣府に心からの祝意を表すとともに、このすばらしい事業にインドを御招待くださったことに対して感謝いたします。インドにとって大変光栄なことです。事業の全期間中私たちをしっかりと支えてくださった管理官、団長、管理部員の皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。事業開始直前の変更にご対応くださった在インド日本国大使館にも感謝いたします。

日本国

NL 永崎 裕麻

はじめに

本事業の目的である、「異文化対応力やコミュニケーション力の向上」「リーダーシップやマネジメント力の向上」「国境を越えた強い人的ネットワークの構築」「各分野でリーダーシップを発揮し、社会貢献活動に従事することをコミットする国際協調精神の育成」につつましめて、今回、高いレベルで達成できたのではないかと考えています。

One PY, One Challenge

日本参加青年のスローガンの一つとして掲げていた「One PY, One Challenge」。チャレンジとは、自分のため、もしくはチームのために、従来の自分の枠を越えて新たな一歩を踏み出すこと。本事業中に各参加青年が少なくとも一つはチャレンジすることをコミットしていました。

このスローガンが多くの日本参加青年の背中を押すことになり、多くの自主活動を生み出したり、全参加青年の前でマイクを握って語る日本参加青年も多く現れました。「世界青年の船」事業という空間は失敗が圧倒的に許容される環境です。船内が一つの大きなラボかのように実験が繰り返され、「One Challenge」に留まらず、挑戦が量産されていきました。参加青年の皆さんが創出した「勇気」の総量が本事業の成功を物語っていると思います。

Team Japan から Team SWY へ

プログラムの前半、日本参加青年は「Team Japan」として、NP や Japan Night の成功に向け、一致団結し活動していました。大きな二つのイベントを終えたプログラム後半は、日本参加青年という単位ではなく、外国参加青年も含めた「Team SWY」として、各参加青年が所属するレター・グループや委員会、クラブ活動、自主活動などのチーム内で、各自、どのような挑戦・貢献ができるのかを模索し、実行していきました。

新しい価値観のインストール

過去2回（SWY19では参加青年として、SWY25ではファシリテーター（教育コース）として）、「世界青年の船」事業に参加させていただいた際、他人と比べて苦しんでしまう参加青年を多く見てきました。今回、「比較して落ち込む」を減らすべく、「違いを楽しむ」を日本参加青年のスローガンの一つにしていました。

「違いを楽しむ」とは、新しい価値観をインストールすること。価値観とは、「自分にとって何が当たり前なのか」です。今までの常識をスクラップ&ビルドすることを目指しました。

本事業に参加しなければ多くの日本参加青年が一生涯、話すこともなかったであろうウクライナやケニア、フィジー、トンガなどからの参加青年と、昼夜を問わず語り倒した経験は、各参加青年の価値観に大きな変化をもたらせたに違いありません。実際、参加青年からは「自分の頭が勝手に作り上げていたいろんな制約を消すことができた」「未来はもっと自由で可能性は無限だと気付いた」などのコメントも出ていました。

無知を知る

「情報」はインターネットで容易に入手することが可能です。ただし、興味をもっていなければ検索するまでに至りません。本事業を通して、参加青年は「自分がいかに無知かを思い知った」「もっと世界のことを知りたくなった」とコメントしています。特に、エジプトとウクライナの革命を描いたドキュメタリー映画は、参加青年にとって衝撃的でした。他にも、沖縄の基地問題や中東の難民問題、南太平洋の貧困、少数民族への差別など。

それらは世界の遠い場所で起きている、自分には何の協力もできない「他人ゴト」なのではなく、船旅を共にした自分の親友たちが抱える、自分にも解決に向け貢献することのできる「自分ゴト」の課題であることを学びました。

謝辞

各国の未来を担う若者たちの人生の変革期に、NL という立場で関わる機会を与えてくださり、感謝申し上げます。また、管理部の方々には、諸問題が起きる中、参加青年のために常に最善を尽くして下さったことを本

当に感謝しております。最後に、のんびりしたNLをサポートし続けてくれた日本参加青年の皆さんと、最強のパートナーとして常時フル稼働してくれたSNLの森田晃世さんに、心からありがとう。

日本国

SNL 森田 晃世

関係者の皆様への御礼

SWY29に日本SNLとして参加できましたことに、関係者の皆様から心から感謝を申し上げます。特に、天候悪化による船酔いの増加やインフルエンザの発生などの困難にも直面しましたが、管理部を始め、皆様に参加青年の安全と安心を優先いただきましたおかげで、無事に帰国することができました。また、寄港地及び給油給水の4か国全てで既参加青年による事後活動組織の御支援を受けることができました。他にもSWY29に関係する全ての皆様からの御支援に、日本参加青年を代表し、心より御礼申し上げます。

心となり、戸惑っている日本参加青年の気持ちを汲み取り、安心できる議論の場を作り、参加青年同士で発言を促し、励まし合う環境作りをする流れが出てきました。これは管理部やNLが前に出て、人を引っ張るリーダーシップの形から、参加青年同士でエンパワメントし合う、リーダーシップの形へと参加青年の意識と行動が変化したターニングポイントになりました。こうして小さな成功体験を積み重ねてきた参加青年は自分の言葉で話すことにためらいがなくなり、次第に相手の話を聞く余裕もできて、異文化に対する理解も進んでいきました。

参加青年間におけるチームビルディングの醸成

日本NLとして日本参加青年と共に「One PY One Challenge、同じで嬉しい・違って楽しいという多様性への理解、チームジャパンへの貢献」の三つを目標として掲げてきました。これらの目標は日本参加青年全員で企画運営するナショナル・プレゼンテーション等や、振り返りを目的とした打合せ時の指針となりました。また、各国NLと共に毎日打合せを行い、研修中の明るい雰囲気作りや適切なルール設定について議論をし、試行錯誤をしながらも取り組みました。その結果、当初は日本参加青年と外国参加青年の間にあった戸惑いや恥じらいがなくなり、国籍や文化・習慣の違いに葛藤しながらも、参加青年同士で助け合いながら乗り越えることができました。船上研修最終日には、しばしの別れに涙を流しながらも、お互いの存在に感謝し、本事業参加前よりも自信を持って自身と世界の将来を語る参加青年を見ることができました。

事後活動に向けた参加青年からの決意表明

研修終盤には、少しずつ自信をつけてきた参加青年は、本事業後の自身の進路やSWYAAのネットワークを活用した事後活動について考え始めました。興味関心が似ている参加青年同士で新規プロジェクトの立ち上げの相談や、研修前には曖昧だった将来に対するビジョンが参加青年同士の助言によってより進路が明確になれ、力強い決意表明を聞くことができました。もちろん、未だに迷いのある参加青年も多くいますが、研修後もお互いにエンパワメントするSWY29の文化が今後も続くように、SNLとして最大限に取り組んでいきたいです。

参加青年のリーダーシップと異文化理解における学びと変化

研修開始当初、日本参加青年から「英語は日常会話以上に話せるけれど、自分に自信がなく、自身の気持ちや考えを表現するのが難しい。失敗が怖くて、大勢の人の前に話すことができない。」という声を何人もから聞きました。これは、研修中盤には日本参加青年を包む全体の雰囲気としても見受けられる特徴となりました。そのような状況の中、留学や移住の経験がある参加青年が中

本事業の今後に向けて

前述ではこれまで国際交流経験が少ない日本参加青年のリーダーシップや異文化理解に対して、参加青年同士のエンパワメントが有効であった事例を記載しましたが、参加青年の半分以上は国際交流経験が多い日本参加青年や各専門分野の修士や博士号を取得している、もしくは実務経験を有している外国参加青年です。研修内容に関しては、彼らのニーズを的確に把握し、参加青年が自身の経験や知見をいかせる運営企画側になる公式プログラムを増やすことが、受動的な参加から、より主体的で積極的な参加を促せると考えます。また、日本参加青年について英語で議論ができる知識や専門分野での実務経験がある人の応募を増やすため、一年以上の海外留学経験者や海外との仕事に従事している日本人への広報をより強化することが、事業全体の更なる成果の発現につながると考えます。

はじめに

SWY29は13か国への心身の旅となりました。この旅は私たちが持つ世界の内側、そして外側双方に対する好奇心を刺激するものでした。人生を変えるこの事業の一員になったことを大変光栄に思います。報告書に書くことはこの事業で経験したことの一部に過ぎません。ケニア参加青年団を代表し、私たちにこのようなすばらしい機会を与えてくださった日本国民、ケニア政府及び各参加国政府へ深く感謝申し上げます。この事業は、今日ますます複雑になる世界的課題に対する解決策を見出し、世界的目標の達成に向けて取り組むリーダー育成への献身と意欲をはっきりと象徴しております。

事業のハイライト

「世界青年の船」事業が世界へ発信するメッセージは、平和です。このメッセージというのは、参加青年の日々の異文化交流、関係構築や後述する活動に限らず、自ら計画した多くの活動を通し、常に参加青年の心に植え付けられていました。このメッセージが、芽を出し、美しい花々を咲かせ、実を付ける過程を見ることでより一層の充実感が生まれました。その実がやがて11か国を越えて世界中に散らばり、人々の心を開き、変化のきっかけとなることを願います。

地方プログラム

ケニア参加青年団は地方プログラムで山形県を訪問しました。これは、ケニア参加青年にとって最も印象深い活動となりました。九里学園高等学校訪問では実際の日本の高校生活に、3日間の米沢市でのホームステイでは、各家庭で日本の生活に触れることができました。雪を見たり、触ったりすることはほとんどのケニア参加青年にとって初めての体験で、大変貴重な経験になりました。

ナショナル・プレゼンテーションと文化活動

文化活動は文化や多様性を通じた各自のアイデンティティの表現だけでなく、互いに学び、分かち合い、尊重し、そして楽しむための優れた方法でした。これらの活動により異文化理解は深まり、私たちの世界観は広がりました。それにより、参加青年は互いの違いを認め讃え、文化に対する固定概念をなくし、文化的多様性に対する寛容さを育みました。

コース・ディスカッションとセミナー

コース・ディスカッションやセミナーは様々な学術的題材や青年や社会に影響する問題全般を中心に展開され

ました。コース・ディスカッションやセミナーを通して、参加青年は新しい概念に対し心を開き、自らが地域の変革に対し貢献できるようなプログラムやプロジェクトを立案し、管理するリーダーになる方法についてじっくり考えました。PYセミナーやスキルセミナーでは、参加青年がお互いの知識や様々な専門分野の知識や技術、能力を互いに学び合うことができました。

寄港地活動

ニュージーランドのオラケイ・マラエでのポウフェリ（伝統的な歓迎の儀式）や、フィジーの村の生活体験、そして様々な課題別視察はコース・ディスカッション及びセミナーでの参加青年の学びを一層深めました。コース・ディスカッション及びセミナーで学習した概念の実用的観念、これら概念をより実用的な観点から捉え、これらの概念が実際の生活の場面でどのように適用されるかについて理解を深めました。

レター・グループ、クラブ活動と自主活動

これらの活動は参加青年主導による活動です。特に自主活動に関しては、その回数及び参加青年の積極的な参加から、彼らが自主活動から大きな満足感を得ていたと言えます。これらの活動を通じて、参加青年は気軽に自分らの経験を分かち合い、会話する機会を得たことで、互いの友好を深め、ネットワークを広げました。お互いから学び合い、リーダーシップを発揮し、それぞれの才能を示すことができました。

主な教訓

この事業を通して、公式、非公式に限らず、以下の点のほかにも様々な教訓を得ました。

- 事業実施における計画の重要性。
- 資源の責任ある使用、特に育成に時間をかけることの大切さ。
- 少数民族との調和を実現できる社会等、全員が参加することの大切さ。
- 衝突をなくし、平和的な社会を築くための効果的対話。
- 防災活動に対するコミュニティの対応能力構築及び本来その土地に備わっている知識の融合はコミュニティにおける防災力の基本的側面である。

提案

- 事業の焦点は参加青年に対してよりも事業自体に当たっているように思いました。レクリエーションや休憩、交流、レター・グループの交流、自主活動を通して参加青年同士の絆を深める機会を作り、そして学習

能力を高めるためにも公式プログラムの時間帯は8:00から17:00にするべきだと考えます。クラブ活動も公式ではなく、自主活動にし、日々のレクリエーション活動の一環とすべきと考えます。

- 集中力を高めるために、週当たりのセミナーやコース・ディスカッションの回数を増やし、それぞれの時間を1時間半以内にすべきと考えます。また、参加青年同士の学歴の差が大きいので、ファシリテーターが二つのコース内容を用意できれば大変効果的であると考えます。一つはコースを深く理解したい人のためのコース、もう一方は基礎知識を把握したい人のために設けるべきです。前者は全ての内容を網羅することとなり、後者においてはいくつかを網羅するコースに留まるでしょう。
- 持続可能な開発目標（GDS）は世界的に注目されており、国際貢献活動（IC）コースの中だけではなく、事業全体において重視されるべきです。そのことによって、参加青年自身の環境における自分の役割の理解が深まるでしょう。

- ナショナル・プレゼンテーション2及びデリゲーション・ナイトに対する負担や競争性を軽減するためにも、例えば、「SWY文化経験」として双方を同日に実施することを提案します。①食べ物・飲み物、②民族衣装、③ダンス・パフォーマンスというように3部構成にして実施できるでしょう。
- NLの多くは様々な専門分野で幅広い経験や知識を持っています。ファシリテーターとして、またレター・グループ内でその経験や知識をシェアすることができます。

まとめ

参加青年は世界を変えるための志を持って活動を計画し、進んで互いに学び合いました。事後活動の実施計画がそれを証明しています。辛抱強く、無私無欲で各国の夢を実現するため、たゆまぬ努力をしていくと確信しています。ケニア参加青年団の夢とは、ケニアのビジョン2030です。SWY29は終わりましたが、世界に変化を起こす私たちの旅は次のステージへ向かっているのです。

ニュージーランド

ジェイ・テアリキ・レレクラ

Nā tou rourou, nā tōku rourou ka ora ai te iwi

あなたと私、両方のバスケットの中の知識を合わせたら、人々は成功を掴むでしょう

日本国政府内閣府、日本国際青年交流機構、訪問国の「世界青年の船」事後活動組織、また、SWY29の成功を導くために計画や構成に多大な労力を費やしてくださいました寄港地関係者の皆様に感謝と敬意を表します。この事業の準備、事業の運営のために御尽力いただいた皆様に生涯感謝し続けます。特に私たちには見えないところで御尽力してくださいました皆様方に、この上ない感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

Hiroshima Tangata, Hiroshima Whenua

広島の人々、広島の土地

4時間という新幹線の旅は高速ではあったものの、車窓から田舎町や様々な都道府県を見ながら、地方プログラムのパートナーであるインド参加青年団と知り合う、大変良い機会となりました。

今回のホームステイを終え、ホストファミリーと広島駅に戻る参加青年の顔からこのホームステイに対する彼らの気持ちを読み取ることができました。私たちにとってホームステイは心に残る経験となったことは一目瞭然で、悲しみの気持ちと共に新幹線で私たちは広島を出発しました。

Whakapari Hinengaro

気持ちの強さ（陸上研修）

参加青年の船上研修へのスムーズな参加を促進するためにもこの事業の一つ一つの側面は極めて重要であると考えます。オリンピックセンターは、大人数という面での需要に応えることができる施設であると思います。オリンピックセンターの環境で実施するには少し難しい内容の活動もありましたが、代わりとなる施設が存在しない限りはオリンピックセンターが陸上研修には最適な施設であると考えます。レター・グループごとの都内視察に外国参加青年を案内して下さった日本参加青年の皆さんに感謝いたします。

安倍晋三内閣総理大臣への表敬訪問は大変名誉なものでありました。また、皇太子殿下とお言葉を交わし、忘れられない経験をさせていただきました。

Haerenga ki wāhi kē

寄港地活動

ニュージーランド、オークランド

オラケイ・マラエにて正式な歓迎を受け、参加青年はマオリの文化を学ぶ基板となる特別な経験を通じて、本物のマオリ文化の特徴を肌で感じる機会となりました。ニッキー・ケイ青少年大臣を表敬訪問し、言葉を交わす素晴らしい機会にも恵まれました。

フィジー、スバ

フィジーに着いたその瞬間から、フィジーの人々のおもてなしは私たちの期待を上回るものでした。フィジー首相表敬訪問に始まり、前フィジー大統領の船上レセプション出席に至るまで、フィジー共和国はSWY29寄港中、各表敬が確実に行われるよう真剣に努めておられました。

Wāhanga Whakawhiti Kōrero

コース・ディスカッション

コース・ディスカッションのトピックは世界規模でかつ顕著な問題を広く取り上げたものであり、各国のニーズについてディスカッションが行われました。事業が進む中、ディスカッションの方向性に対する不満を訴えたり、自分の考え方に影響を与えるような気付きを得た等、コース・ディスカッションに対する各参加青年団の感想は様々でありました。参加青年主導の話合いや討論はニュージーランド参加青年団に限らず、多くの参加青年から最も注目され、高く評価された活動でした。

以前の事業に比べ、インフルエンザによるプログラム変更の影響もあり、今回の事業はかなりタイトなスケジュールとなりました。そのことが原因で、情報の取り入れやコース・ディスカッション中に話し合われた会話を消化する時間はありませんでした。

He Wāhanga Rangatahi, He Wāhanga Rangatira PY セミナー

PY セミナーや参加青年主導による討論やプレゼンテーションに対する参加青年の評価は高いものでした。参加青年の多岐にわたるスキルや優れた才能により多くの注目が集まりました。このような高い専門性を発揮できる機会がよりあれば更に良かったと考えます。

Ngā Kōrero ā Whenua

ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは現在も過去もこの

事業を通して一番注目される活動です。ナショナル・プレゼンテーション1では、参加各国が成し遂げた成功や直面している課題の洞察をデータや事実を基に紹介しました。ナショナル・プレゼンテーション2は伝統文化と現代文化が混在し、各国の文化景観の美しい写真のようでした。

Ngā whakaaro

感想と提案

- 1) 私の意見を述べさせていただきますと、オリンピックセンターにて外出禁止とされることは理解に苦しみます。そのことが、参加青年に反感を抱かせる結果となったと考えます。彼らを若いリーダーと認めているのであれば、バランスのとれた取組が必要であると考えます。私の経験から、参加青年を子供のように扱ってしまうと、彼らはそのような行動を取ってしまうのです。
- 2) 事業は息つく暇もないほど集中的なものでした。アドバイザーによるセミナーを参加青年主導のセミナーと連動させて行えば参加青年にとってより有益なものになったのではと考えます。一つの解決策として、先ずアドバイザーによるセミナーを午後5時までを行い、夜のセッションは参加青年主導によるセミナーを行うことを提案します。高いレベルのセッションを求めている参加青年の不満を軽減するだけでなく、過密日程によるストレスの軽減になるでしょう。この解決策により一日のスケジュールに満足でき、より「実社会」に近い討論をもたらしてくれると考えます。
- 3) ナショナル・プレゼンテーションを2部構成にしたことはすばらしいアイデアであると思います。この2部構成を続けるべきであると考えます。
- 4) ニュージーランド事後活動組織のスケジュールリングに問題があったのかもしれませんが、正式の歓迎セレモニーには全ての青年が参加するべきであると考えます。

トンガ王国

エレニー・ポエセ

「神を愛する人々、すなわち、神の御計画に従って召された人々のためには、神が全てのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

—ローマの信徒への手紙 8章28節

SWY29の準備

研修として毎週ミーティングを行い、今回の旅に備えました。2016年9月から2017年1月にかけて、ナショナルユニフォーム、伝統衣装、公式贈呈品等の費用を調

達するため、様々な資金調達活動をしました。

異なる意見や経歴を持つ11か国から集結した参加青年のリーダーとなることは挑戦であり、光栄なことでしたが、神様の助けにより成し遂げることができました。ニュージーランド及び日本への入国にビザの申請が必要でした。幸いにも日本入国ビザに関しては日本国大使館が負担していただきました。ニュージーランドのビザに関しては、申請費用を支払いました。このような準備の工程はトンガ参加青年にとって、リーダーシップや時間

管理能力強化の良い勉強となりました。ニュージーランドのビザは12月末に得ることができました。

準備段階において、2名の参加青年に変更がありました。年齢制限を超えていた前任者の代わりにマテリタ・ホウアが参加することになり、家庭の都合で参加できなかったラウラウピーラウの代わりにシオネ・コロアマタンギが参加することになりました。トンガ参加青年は二人を温かく迎え、彼らはすぐSWYファミリーの一員となりました。トンガ事後活動組織会長であるレハ氏は次回トンガが「世界青年の船」事業に招へいされる場合は、ラウラウピーラウを最優先で選考することを依頼し、トンガ政府は了承してくださいました。

参加青年の学習のための訪問を受け入れ、この旅を可能にくださった様々な機関に感謝申し上げます。また、SWY29に参加するに当たり、継続的な御支援をくださいましたトンガ政府に感謝いたします。内閣府、担当大臣、補佐、スタッフの皆さんの御支援に深く感謝いたします。皆様に神の御加護がありますように。

山形県（ホームステイ）にて雪を体験

山形県 IYEO メンバー及び山形県民の温かい歓迎を受け、まるでトンガの自宅に帰ったかのような気持ちになりました。何よりも降ってくる雪を目にし、そして体験しトンガ参加青年団は味わったことのない気持ちの高鳴りを感じていました。山形に到着し、県内の高等学校や博物館を訪問し、その後歓迎会を開いていただきました。

そこでホストファミリーと対面し、ケニア、トンガ、山形県の青年によるパフォーマンスが披露され、そこは異文化学習の場にもなりました。ホームステイは全員にとって忘れられない経験となりました。このホームステイで何よりも先ず日本文化を経験させていただきました。この二日間の滞在で私たちはその文化に敬意を覚え、そして大好きになりました。全員がホームステイですばらしいときを過ごし、忘れられない思い出を作りました。私たちが山形を離れるとき、参加青年とホストファミリーは名残を惜しみ、名刺や写真を交換していましたが、新幹線が出発してもずっと涙が止まりませんでした。愛と真心を分け与えてくれた山形県にマロアウピト、トンガ語で心からありがとう。私たちは山形県で過ごした一瞬一瞬を大切にしていまいます。またお会いしましょう。

陸上研修

一週間の日本滞在の後、言うまでもなく誰もが日本参加青年に会うことを心待ちにしていました。オリンピックセンターに到着し、日本参加青年が外国参加青年の帰りを歓迎している声が聞こえていました。そこで私たちは200人以上の参加青年と出会うこととなりました。トンガ参加青年はそれぞれのレター・グループに紹介され、そこからお互いのスキル、知識、文化、そして伝統の交

流が始まったのです。レター・グループごとに都内視察にも出かけました。感謝しきれないほどのすばらしい機会を頂けたと感じております。

陸上研修の一週間の間にコース・ディスカッションやセミナー、事業運営のための委員会設立等、参加青年のリーダーシップを育成する研修が始まりました。

NL や SNL は一生に一度のチャンスである、皇太子殿下表敬訪問及び安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問を行いました。お二方はこの「世界青年の船」事業の重要性を述べ、各国参加青年は希望であり、最善の努力を尽くすよう私たちを鼓舞してくださいました。

船上研修及び活動

コース・ディスカッション

各自の興味を基準にディスカッションコースにそれぞれ振り分けられました。コースの定員の関係で希望するコースに入れなかった参加青年もいました。参加青年はコースから皆同等な学びを得るとともに、各国における喫緊問題やそれに対する解決策を共有しました。各国の開発につながる情報及び知識共有ができました。これらの情報を持ち帰り、社会や国全体の改善構築に役立てるため関係部門に共有することが目的です。

リーダーシップ・セミナー

このセミナーでは全員が発揮している異なる側面のリーダーシップについて学びました。つまり、内側からのリーダーシップ、前からのリーダーシップ、後からのリーダーシップ、横からのリーダーシップです。これら全ての側面が等しく重要です。また、様々な傾聴のスタイルを学び、常に意識して聞くことの大切さを学びました。

謝辞

始めに神の日々の御加護に感謝します。この旅の一員としてトンガ参加青年団に信頼をおいてくださり、日本国政府に感謝申し上げます。私たちに御支援、愛、そして御親切を頂きました、タニア・ラウマヌルベ・トゥポウ閣下並びに私たちを訪ねて来てくれたトンガの皆様から感謝申し上げます。世界中の若いリーダーに投資いただいていることを十分に理解し、そのことを感謝いたします。日本国政府の期待に私たちがお応えできていれば幸いです。私たちがトンガ王国の代表として使命を果たせるよう御支援くださいました親愛なるトンガ王国政府に深く感謝申し上げます。仲間であるトンガ参加青年に敬意を表します。皆さんに神の御加護がありますように、そして心からあなた方を愛しております。皆さんの献身的な支援に心からありがとう。

OFA LAHI ATU

愛をこめて

はじめに

日本国政府内閣府がウクライナ団をこの「世界青年の船」事業に御招待くださったことに対し、ウクライナ参加青年団を代表して心から感謝申し上げます。今回ウクライナが初めてこの事業に招かれたことは大変光栄です。PY セミナーやクラブ活動、コース・ディスカッション、インフォーマルな語り合いなどを通じた学びのほか、セミナーやワークショップを通してウクライナの現状を世界の人々に知っていただくとても貴重な機会ともなりました。これらの学びから私たちは、今後それぞれの携わる様々な分野において社会貢献を進めていくための大きな動機付けや関心を得ることができました。

参加青年選考プロセス

選考過程は透明性をもって行われ、参加青年のうち8名は選考委員会を選び、NLを含む4名は在ウクライナ日本国大使館が候補者を指名しました。

選考の3段階

- 1) 参加申請書、履歴書及び参加動機に関するビデオ「私がウクライナ団のメンバーに選ばれるべき理由」の提出。
- 2) 個別面接。面接官は、大使館代表職員、青年スポーツ省代表職員、Bohdan Gavrylushyn 財団理事長、外務省代表職員など。
- 3) 筆記による心理テスト

選考過程を経て、結果は青年スポーツ省のウェブサイトに掲載されました。私は、NLとしてウクライナの主要テレビ局を訪問し、事業についての説明を行いました。日本への出発の前には、青年スポーツ省が記者会見を設定し、角茂樹在ウクライナ日本国大使、青年スポーツ省代表及び私たち参加青年が出席して、「世界青年の船」事業の説明をしました。

日本に到着

日本までの航空券など必要な手配は旅行会社が行いました。到着時に荷物の不着という問題が起りましたが、管理部の方々が理解を示してくださり、解決に向けてできる限りの協力をしてくださいました。フライトは大変順調でしたが、それでも時差ボケは避けられませんでしたので、到着時に用意されていたホテル環境に大変助けられました。

山口県でのホームステイ

日本の御家庭に招き入れていただくという大変貴重な機会を通して、日本の方々の日常生活に触れることができたと同時に、日本文化と伝統、そして人々のおもてなしの心についての大切な学びを得ることができました。

御家庭に泊めていただくに当たって私たちが当初いただいていた心配は、すぐに消えていきました。まずは、青年交流センターでの心温まる明るい雰囲気歓迎を経験し、それに続けて着物の着付けやお茶会というとても貴重な体験をさせていただきました。あの日の思い出は、今でも私たちの心に温かな感情を湧き起こすものになっています。おもてなしの心と人々の寛大さに心を打たれました。大変強い絆が生まれたと同時に、ホストファミリーの皆様や山口県の方々との素敵な思い出ができました。

ホームステイを通して、日本文化を直に学ぶことができたと同時に、訪問先に伝わる独特な伝統に触れることもでき、日本のことをより深く理解する機会となりました。

NYCにおける陸上研修

NYCでの研修は、船上研修に備えるためのとても良い機会となりました。私たちが7日間過ごすことになるNYCにバスで到着すると、日本参加青年が歓声をもって出迎えてくれ、それがその後の陸上研修中ずっと続いたとても良い雰囲気を作り出す要因になったと思います。

NYCで行われたリーダーシップ、プロジェクトマネジメント、異文化理解の各導入セミナーは、事業全体を通して意義のあるものとなりました。また、NYCでの時間は、他の国の参加青年の雰囲気をつかむ良い機会ともなりましたし、互いに知り合い、絆を育み、お互いの文化的な特徴を理解する機会ともなりました。

ウクライナ参加青年の何人かは、自由時間の少なさと夜間外出禁止の決まりが厳しすぎると感じました。決まりには理由があることは分かるのですが、これらの制限があるために青年たちは東京の本当の姿に触れることはほとんどできませんでした。

皇太子殿下御接見と内閣総理大臣表敬訪問は、ウクライナを招へいいただいたことの感謝の気持ちを伝える場面となっただけでなく、個人的には最も印象的な場面となりました。

船上活動

船上研修の開始当初、参加青年には興奮と若干の不安が見られましたが、それも出航してすぐに解消され、新

たな出会いと絆作りに向かう大きな喜びとエネルギーという形になっていきました。

その後、インフルエンザ拡大防止のための厳しい対策が始まり、キャビン待機の4日目には参加青年の士気の低下も見られるようになりましたが、NLたちの努力によりこれを克服しました。このような状況下で、管理部の方々も研修の実施に関して様々な工夫をされ、テレビでの参加青年によるタレントショー企画や、同じくテレビを通したセミナーの実施などの対応が取られました。

インフォーマルな集まりや、レター・グループでの活動、コース・ディスカッションなどを通して、お互いの文化を理解し合う基盤が作られました。またNYCで培われた絆を強める機会が得られただけでなく、それぞれのリーダーシップや、プロジェクトマネジメント能力も向上させることができました。参加青年の企画したスキルセミナーや自主企画では、国境を越えた相互理解や尊敬の念などを強めることができました。また、宗教間や異文化間、言語の壁など、世界が今まさに直面しているいくつかの課題に対する共通のビジョンを作り出すこともできました。SWY29参加国間はもとより、既参加青年とのネットワークも作ることができました。

コース・ディスカッション

各コースはファシリテーターが計画進行し、現代的な課題を参加青年全員で話し合うことができるように工夫されていました。全般的には、教育的なビデオを見たり、ゲームをしたりなどから学びを得ました。私が個人的に一番良いと思ったのは課題別視察でした。課題や解決方法について語り合うだけでなく、ディスカッションに関連する現場での仕事を実際に見ることで、問題の解決につながる良い視点を持つ助けになりました。

PY セミナー

PY セミナーは、誰かから学ぶための機会であったと同時に、人々への伝え方を学ぶ機会にもなりました。企画した参加青年は準備と実施に力を注ぎ、他の参加青年と知識や文化を共有したり将来の協力関係について話し合ったり、その分野の専門的な経験のある人からの学びを得たりしました。一番重要なことは、参加青年がそれぞれの自由時間を割いてまで話を聞き、学び、教、そし

て助け合ったことでしょう。

ナショナル・プレゼンテーション

自国を他の人たちに紹介するのは、各々にとってとても大切で感情の高まる場面となりました。それぞれの国の参加青年が自国の文化に深くつながっていることが各国の発表から伝わってきましたし、発表者一人一人が自分の語ることに感情移入していることが感じられました。この時に感じられた国境や偏見を越えたつながりの気持ちは、事業の終了後もずっと続くことでしょう。

寄港地活動

ニュージーランドのオークランドは自然の美しいところですが、それ以上に多様性の美しさが際立っていました。最初の寄港地であるオークランドに降り立つとすぐに、同地での体験が素晴らしいものになるであろうことが分かりました。マラエへの訪問で、マオリに人々の文化と、訪問地の部族の人たちの歴史を学びました。小学校への訪問では、ニュージーランドの若者との交流ができました。自由時間には、多様性と文化の街を散策することができました。

フィジーのスバでの時間は、私たちにとって新たな文化的体験になりました。この忘れがたい企画を準備してくださったフィジー政府青年スポーツ省とSWYAAフィジーの皆さんを敬服いたします。村訪問では、農民の方たちが伝統と工業化の間で自分たちの道を見付けている姿がとても印象的でした。本当の生活に根付いたフィジー文化を体験できたことは、強く思い出に残ることでしょう。

将来の「世界青年の船」事業のために

今回、「世界青年の船」事業では唯一のヨーロッパからの参加国であり、SWYファミリーに初めて加わる国として、将来の「世界青年の船」事業の参加青年にも挨拶を送りたいと思います。

「世界青年の船」事業の参加国となれたことは、ウクライナ参加青年団にとって名誉なことでした。世界の抱える課題に立ち向かうために、各国のSWYAAがつながり、協力し、そして結果を生み出していきましょう。

船長からのメッセージ

にっぽん丸 船長 二宮悟志

SWY29の航海を無事に終わることができ、まず、当航海・事業に関わった全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

船上にて現場指揮に当たられた大熊管理官、大部副管理官、そして村田主任を始めとする管理部の皆様、当事業に関わる内閣府の皆様、日本青年国際交流機構及び寄港地を含めた各国関係者の皆様方に重ねて御礼申し上げますとともに、当該プログラムが成功裡に終わられたことを心よりお慶び申し上げます。

山崎団長、アドバイザーの皆様、各国ナショナル・リーダーの皆様、そして当事業の主役となられた参加青年の皆様、船上研修大変お疲れ様でした。皆様が笑顔で日本に戻って来たことが船長として一番の喜びでございます。34日間、11か国・文化・人種・思想・宗教などが異なる様々な人たちとの洋上での団体生活は始め戸惑いを感じた方もいたかと思いますが、航海の終わりが近づく頃には「SWY29の仲間」という感情が生まれたのではないのでしょうか。もしかすると、それ以上の「友情」「信頼」「尊敬」などの感情も参加青年の皆様の中に芽生えたかもしれません。34日間は人と人とが互いに良く知り合うには十分な時間ではなかったかもしれませんが、洋上・船の中という特殊な環境で、共に生活をし、同じ課題に取り組み、同じ困難を乗り越え、同じ喜びを分かちあったことで、短い時間でもこのような感情が芽生えるのではと思っています。

航海を振り返ってみますと、1月30日大勢の方のお見送りを受け横浜港を出港。東京湾を出ると低気圧の影響により船の揺れが大きくなり、出港当日から船酔いで辛い思いをした方も多かったと思います。翌日にはこの波もおさまり、船長講話の際、参加青年の皆様の元気な姿を見て安堵したことを憶えています。航海全般を通じて平穏な海とは言えませんが大きな時化もなく航海そのものは順調でした。しかしインフルエンザ対応で

は日本に帰着する最後の最後まで、管理官を始め管理部の皆様方は大変な御苦労・御心労であったかと思います。インフルエンザのコントロール及びプログラムの組替えなど、管理部主導の適切な対応の結果、主要なプログラムは実施でき、ナショナル・プレゼンテーションでは私も興味深くそして楽しく拝見させていただきました。補給港のポート・ビラでは参加青年の皆様が楽しそうに街中を散策していたのをお見かけしましたが、この時は同じ国同士のグループで行動されていた方が多かったように感じました。ポート・ビラ出港後も平穏な海ではありませんでしたがこの頃には、ほとんどの参加青年の皆様も体が船に順応してか、船酔いもなく元気に船内生活を過ごされた様子で、2月12日から14日には最初の訪問国であるニュージーランドのオークランドへの寄港、17日から20日には次の訪問国であるフィジー共和国のスパバ寄港、各訪問国では寄港地活動及び自由時間それぞれ有意義に時間を過ごされたのではと思っています。スパバの街中では自由時間を国等関係なく構成された参加青年のクラブを多く見かけ、各国参加青年同士打ち解けあっているようにお見受けしました。その後も航海は順調に進み、補給港のホニアラ港に23日寄港、そして8日間かけての日本への航海でした。この最後の区間では、参加青年の皆様には洋上での赤道上にいるという体験、小笠原諸島でクジラとの遭遇、美しいサンセットそしてグリーンフラッシュなど貴重な体験も経験できたのではないのでしょうか。

最後となりますが、参加青年の皆様が当該プログラムにて得られた経験・知見をそれぞれの分野で役に立て、今回築かれた友好関係を今後更に深め、お互いに「信頼」「尊敬」「協力」し合える、グローバルな視野を持つリーダーとなり、各方面において活躍されることをお祈りいたします。